

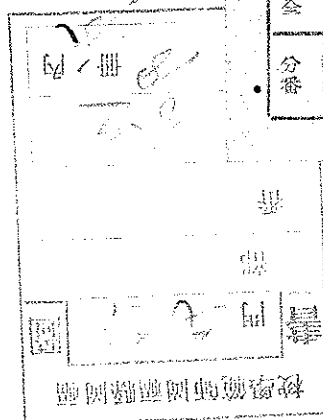
孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

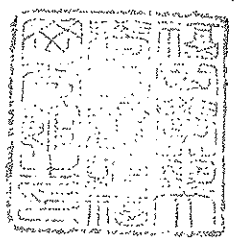
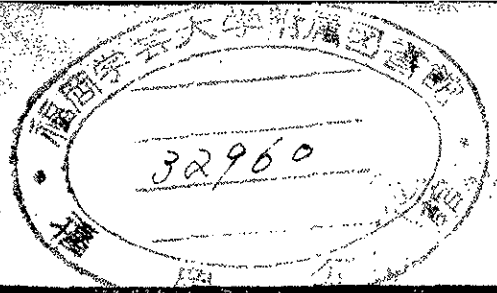
第廿八卷上

福岡第一師範學校
(學校圖書)

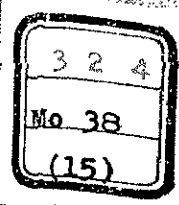
登錄 番號	第	號
社會科學門		
法律法學部		
總記	款	最書項
目		次
全 18 冊 / 內第 15 冊		
分類 番號	第	號
320.8		



T1A1
23
Ka11ba



圖書 和圖書 週



福岡教育大学蔵書

孟德斯鳩著
何禮之重譯

萬法精理

明治九年
一月刻成

何氏藏版

萬法精理第十五冊目次

卷之二十八上 佛國民法ノ起原及ヒ其ノ變遷沿革

ヲ論ス

- 第一回 日耳曼諸蕃民ノ法律性質各相異ナル事
- 第二回 諸蕃民ノ法律ハ都テ人身ニ關係スル事
- 第三回 撒利律ト西峨土不根底ノ法律トニ大差アル事
- 第四回 何故ニ羅馬ノ法律ハ佛朗克人ニ從屬セ
ル土地ニ於テ散佚シ却テ我土人不根底
人ニ從屬セル土地ニ遺存シタルカ

萬法精理 卷之二十八上 目次 一

第五回 全上

第六回 如何ニシテ羅馬ノ法律能ク倫巴多人ノ封疆内ニ地步ヲ占メ得タルヤ

第七回 如何ニシテ西班牙ニ於テ羅馬法ハ滅絶セシカ

第八回 偽作ノ集會法例

第九回 諸蕃ノ法典及ヒ集會法例ノ廢失セル由來

第十回 全上

第十一回 諸蕃民ノ法典カ羅馬法集會法例ト齊

レク逸失ニ歸セル其他ノ原由

第十二回 鄉慣土俗羅馬及ヒ諸蕃民ノ法律ノ沿革

第十三回 撒利律即チ撒利ニ住居スル佛人ノ法律及ヒ里布利ニ住居スル佛人ノ法律ト諸蕃民ノ法律トノ差別

第十四回 其他ノ差別

第十五回 考論

第十六回 撒利律ノ熱湯審法ヲ論ス

第十七回 我カ先人ノ奇想ヲ論ス

第十八回 格闘審法ノ確立セル緣由

第十九回 撒利律羅馬法カ集會法例ト俱ニ廢絶

シタル新理ヲ論ス

第二十回 榮譽ノ原始

第二十一回 夏ニ日耳曼人ノ榮譽ヲ論ス

第二十二回 格闘審法ノ景狀

第二十三回 格闘審法ノ成規

第二十四回 格闘審法ノ定則

第二十五回 格闘審法ノ區域

第二十六回 原被ノ一人ト證人トノ格闘審法ヲ論

ス

第二十七回 原被ノ一人ト訴人ノ同輩トノ格闘審

法及ヒ裁判不當ノ上告ヲ論ス

萬法精理卷之二十八上

何禮之譯

佛國民法ノ起原及ヒ其ノ變遷沿革ヲ論ス

第一回 日耳曼諸蕃民ノ法律性質各相異ナル事

日耳曼ノ佛郎克族ハ郷土ヲ去リテ後チ其ノ族中ニテ
智識アル者ノ助力ニ賴リテ撒利律ヲ編輯シ里布利ニ
住ム佛朗克族ハ哥羅味王ノ麾下ニ屬シテ撒利族ト連
合スルニ因テ自己ノ風俗慣習ヲ保存シタリケレバオ
ーストラシヤ王帖阿陀力ノ命ヲ以テ之ヲ書冊ニ筆記

シ夏ニ又此ノ王國ノ附庸タル巴威略人日耳曼人ノ慣
習ヲモ蒐集セシメタリ日耳曼ノ諸部落皆ナ他國ニ遷
徙シテ國力自ラ衰弱セシガ故ニ佛朗克族ハ侵入ノ進
路ニ當レル邦土ヲ征服セシ後チ更ニ方向ヲ轉シテ後
面ニ向テ却行シ遂ニ祖先發跡ノ地タル森林マデ版圖
ヲ擴張シタリ突林克族モ亦タ帖阿佗力王ニ臣屬シタ
レハ其ノ法典モ亦タ必ス該王ノ制定ニ出デシナルベ
シ佛里斯族ノ如キハ却列嗎爾訥及ヒ百濱王ニ征服セ
ラレタルヲ以テ其ノ法律ノ制定ハ蓋シ諸王ノ後ニ在
ルベシ甲列曼帝ニ至リ始テ薩遜族ヲ征服シテ法律ヲ

制定シ今日マデ尚ホ其ノ存スルヲ見ルヘク且ッ弗里斯
ノ法律ト薩遜ノ法律トニ至テハ一讀シテ其ノ勝國主
ノ手ニ出テシモノニテ全ク日耳曼諸蕃族ノ法律ト歸
趣ヲ殊ニスルヲ知ルヘシ西戡土人不根底人倫巴多人
モ王國建立ノ後直チニ其法律ヲ典籍ニ編輯シタレバ
其ノ趣意ハ唯タ自己ノ典型ニ供スルニ止マリテ敢テ
亡國ノ人民ヲ要シテ我カ慣習ニ遵依セシマル爲メニ
アラズ

撒利里不利ノ二律ハ啊列漫人巴威略人突林克人弗里
斯人ノ諸法律ニ於ルト齊シク固有ノ素質ヲ存シテ絶

テ他國ノ風俗ニ汚染セザルヲ以テ單純簡易實ニ讚美
スヘキアリ加之諸蕃民ノ中獨リ佛朗克人ヲ除ク外ハ
鄉國ヲ離レ去ラサルガ故ニ法律ヲ更改セシコト多カ
ラズ其ノ他方ニ遷徙シタル佛朗克人ト雖モ建國ノ版
圖ハ半ハ鄉國ニ亘タルヲ以テ其ノ遵依スル所ノ法律
ハ日耳曼ノモノニ外ナラサレバ西我土人倫巴多人不
垠底人ノ如キニ至テハ人民一タビ居ヲ新土ニ定メテ
氣質ヲ變移スルニ從テ法律モ亦タ轉遷シテ全ク本來
ノ面目ヲ失却セリ

不垠底王國ハ命數甚タ永カラサルヲ以テ大ニ勝國民

ノ法律ヲ變更スルニ暇アラス其ノ慣習ヲ典籍ニ編集
シタルゴントボールド、シギスモンド二王ハ乃チ該國
末世ニテ有爲ノ主君ニシテ其ノ他賢明ノ人ヲ生セス
倫巴多人ノ法律ハ變更ヲ受ケシニアラズ寧ロ之ヲ増
補スト謂テ可ナリ魯達利制定ノ法律ニ次テダリモア
ルダスル、イト、ピン、トス、ラチス、アストル、ブス等ノ
制作アリシカハ新タニ一ノ體裁ヲ成スニ至ラズ特リ
西我土人ノ法律ノミ諸王其ノ體裁ヲ一變セシ後ニ僧
徒之ヲ改革シタリ

我が佛國第一朝ノ諸王ハ撒利里布利ノ法律中ニテ基

督ノ教理ニ抵觸シテ兩立ス可ラサルモノヲ削除シタ
レ其ノ本體ヲ更改セス依然之ヲ保存セリ西峨土ノ
法律ハ全ク之ニ及シテ全部ヲ更改セリ

不氓底人ノ法律殊ニ西峨土人ノ如キハ肉刑ヲ准行シ
タレ其撒利里布利ノ法律ニ於テハ之ヲ許容セズ此彼
相比照スルハ其ノ美質ヲ改ムル一層鮮ナキヲ覺
フ
不氓底人西峨土人ノ封域ハ外寇侵入ノ衝ニ當ルヲ以
テ勝國ノ人民ハ務メテ土人ヲ愛撫シテ其ノ歡心ヲ得
ント欲セルヨリ最モ公平ナル民法ヲ制定シタレ其佛

朗克ノ諸王ハ權力確立シテ更ニ外患アラザルガ故ニ
其ノ治國ノ思慮自ラ一轍ニ出ルヲ能ハス

仏朗克人ノ方域内ニ居住スル撒遜人ハ其ノ性頑硬ニ
シテ輒スク反亂ニ與ス故ニ撒遜人ノ法律ヲ見レバ以
テ勝國主ノ猛威ヲ想像スルニ足ル此ノ如キ嚴刑峻法
ハ之ヲ自餘諸蕃民ノ法律ニ於テ見ザル所ナリ

罰鍰ノ規則ニ於テ日耳曼法律ノ精神ヲ看ルヘク肉刑
ニ於テ勝國主ノ精神ヲ看ルヘシ

諸蕃民ガ其ノ郷土ニ於テ犯セル罪惡ヲ懲スカ爲メニ
ハ肉刑ヲ用キ而シテ日耳曼法律ノ精神ハ之ヲ國境ヲ

踰エテ犯セル罪惡ニノミ施行セリ

又明カニ人民ニ示シテ曰ク毫モ罪ヲ犯セル者ヲ寬宥スルナカルヘシ假令寺院ニ遁レテモ罪ヲ赦サ、ルベシ

西峨土諸王ノ朝廷ニ於テハ僧官無限ノ勢威ヲ有シテ國家ノ大事モ其ノ議定スル所ニ係レリ今日宗教監査司諸法院ニ遵用スル處ノ法理、法訣、乃至其ノ旨趣ハ皆ナ西峨土ノ法律ノ遺制ニシテ僧徒ハ當時ノ僧官ガ猶太宗徒ヲ凌虐スル為メニ制定シタル法律ニ准據スルニ過キズ

一方ノ見點ヨリ觀察スルキハ昂的伯彌王ガ不埒底人ノ爲メニ制定セル法律ハ頗ル精詳ニシテ事理ニ當ルモノトス魯達利其他倫巴多諸王ノ法律モ亦タ更ニ一層ノ美ヲ加フヲ覺フ然ルニ西峨土ノ法律譬ヘバレヒレイントス、チャインダレイントス、エジガス諸王ノ制定セルモノニ至テハ徒ニ細察煩苛ナルノミニテ要領ヲ得ス專ラ理論ニ馳テ主義貫徹セズ法制ノ大體定ラス文法極メテ浮薄ナリ

第二回 諸蕃民ノ法律ハ都テ人身ニ關係スル事

諸蕃民ノ治身律ガ其ノ一州一郡ニ限リテ作用ヲ有セサル所即チ自餘ノ法律ニ比シテ大ニ性質ヲ殊ニスル所ナリ佛朗克人ヲ治ムルニハ佛朗克族ノ法律ヲ用キ其ノ他亞列曼人ノ如キ不根底人ノ如キ羅馬人ノ如キ各自固有ノ法律ニ遵依シ決シテ他國ノ治身律ヲ以テ之ヲ約束セザルガ故ニ當時ノ勝國主ニテ絶テ劃一ノ法律ヲ制定セシ者アルヲ見サル而已ナラズ夏ニ亡國人民ノ爲メニ法律制定ノ思想ヲ起セシヲモ見ル可ラザルナリ

予ハ法律ノ各異ヲ致ス淵源ヲ日耳曼人ノ風俗ニ於テ

發見セリ日耳曼人ハ湖沼山林ヲ隔テ、各族各處ニ散在シテ自ラ一部落ヲ成セリ該撒ノ征討紀ニ日耳曼人ハ離群索居ヲ好ムト言ヘル是ナリ然リ而シテ唯タ羅馬人ノ武威ヲ怖ル、ニ因テ諸族相合集シテ一大衆ヲ成シタレ其尚ホ其ノ大衆中ニテ各族ノ民ヲ治ムルニハ各郷土ノ舊習古慣ヲ遵用セリ又其ノ初メ各處ニ散居セル諸族ハ皆獨立シテ毫モ他ニ隸屬スル所ナキヲ以テ其ノ合集雜居ノ時ニ至テモ更ニ自由ノ氣象ヲ失フ一無ク一國ヲ諸族ニテ共有シ、各異ノ政體ヲ建テ恰モ全國異種ノ國民ヲ爲セリ是故ニ諸蕃民治身律ノ精

神ハ乃チ未タ其ノ郷土ヲ去ラサル以前ヨリ准行スル
所ノモノヲ移シテ其ノ征服セル邦土ニ施行シタルナ
リ

諸蕃民ノ法典中マルクルフスノ章程ニ此ノ舊慣故習
ヲ記載スルヲ見ルヘシト雖モ其ノ大半ハ里布利人ノ
法律ト第一朝諸王ノ布令中ニ出テ而シテ第二朝ニ至
テ議定セル慣習法例ノ根本ト爲レリ右慣習法例ニ據
レバ、子ハ父ノ法律ヲ嗣キ、婦ハ夫ノ法律ヲ承ケ、寡婦ハ
再ヒ外家ノ法律ニ歸シ、奴隸ヨリ新タニ自主民タルモ
ノハ保主ノ法律ニ遵フヘク、其他各人皆ナ我ガ好ム所

ノ法律ヲ採用スルヲ得タルニ更ニ魯達留第一世ノ
憲法ニテ公然ト撰擇ヲ爲サシメタリ

第三回 撒利律ト西峨土不根底ノ法律トニ大
差アル事

既ニ論述スルカ如ク不根底人西峨土人ノ法律ハ頗ル
公平ヲ極メタリト雖モ撒利ノ法律ニ至テハ佛朗克人
羅馬人ノ間ニ分界ヲ立テ寛猛甚タ懸隔セルヲ以テ然
リト謂フヲ得ス若シ佛朗克人或ハ撒利律ニ治メラル
ル人民、人ニ殺害サル、片ハ其ノ親族ニ二百ソール貨
幣ノ稱ニシテ大
約一錢強ニ當ルノ贖金ヲ納ムヘク若シ羅馬ノ地主ナ

レハ其ノ半額即チ一百ゾールヲ納ムベク若シ羅馬ニ
隸屬セル國ノ人ナレバ僅ニ四十五ゾールヲ以テ足レ
リトス、又國王ノ家臣ヲ殺害シタル償金モ亦タ人種ニ
因テ同シカラズ佛朗克人ナレハ六百ゾールヲ納メ羅
馬人ナレバ國王ノ賓士タリト雖モ三百ゾールニ過ギ
ルヲ要セズ其ノ佛朗克人羅馬人ノ間ニ厚薄ノ別ヲ設
クルヤ斯ノ如シ豈暴戾ノ極ト謂ハサル可シヤ
加之若シ數人黨ヲ結テ佛朗克人ノ家ヲ襲ヒ之ヲ殺ス
キハ撒利律ニ於テ犯人ニ六百ゾールノ罰鍰ヲ納メシ
ム但シ其ノ殺害サレタルモノ羅馬人若クハ新タニ自

主ヲ得タル人民ナレハ半額ヲ追徴スルニ止マル又此
ノ法律ニ據レハ若シ羅馬人擅ニ佛朗克人ヲ拘禁スル
キハ三十ゾールノ罰鍰ヲ追徴スレモ佛朗克人ノ羅馬
人ニ於ルハ唯タ十五ゾールニ過キス又若シ羅馬人カ
佛朗克人ヲ劫掠シテ其ノ衣服ヲ剝奪スル時ハ六十二
ゾール半ノ償金ヲ納メサルヲ得ズ之ニ反シ佛朗克人
カ羅馬人ヲ劫掠スルキハ半額三十ゾールヲ納ムルノ
ミ其ノ人權同等ノ平ヲ得サルヤ斯ノ如シ羅馬人疾苦
ノ狀態實ニ惘然ノ至ナリ
然ルニアツベード、ボスノ如キ著述ヲ以テ一世ニ鳴リ

レ人ニシテ臆測ノ説ヲ立テ佛朗克人ヲ羅馬人ノ親友
ナリト爲シテ佛朗克人カ高廬ニ建國シタル事ヲ記セ
リ果シテ其ノ説ノ如クナラバ佛朗克人カ幾多ノ損害
ヲ受ケ得タルハ其ノ羅馬人カ親友ナルノ故ニ由ルカ
又其ノ初ノ佛朗克人カ兵カヲ以テ羅馬人ヲ屈服セシ
メ而ノ後チ法律ノ作用ニ因テ之ヲ虐待シ其ノ法庭常
ニ流血斷ヘサルハ必竟佛朗克人カ羅馬人ノ親友タル
ノ効驗ナルヤ其ノ佛朗克人ヲ以テ羅馬人ノ親友ナリ
ト説クハ恰モ漢土ヲ征服シタル韃靼人ヲ以テ支那人
ノ親友ナリト爲ルニ異ナラズ

更ニ加特力教ノ僧官ノ説ニ一步ヲ譲リテ其ノ佛朗克
人ニ左祖セシハ全ク之ヲ用キテ以テ亞里安教ヲ勦滅
スルノ機械ト爲スニ過キズト思察スルモ何ソ僧官ノ
清貴ヲ以テ蕃民ノ法權ノ下ニ棲ムヲ希望スルモノ
アランヤ況ヤ之ヲ以テ佛朗克人ガ特ニ羅馬人ヲ親愛
スルノ證左ト定ム可ラサルニ於テヤ予カ推測スル
所ハ全ク前説ト同シカラズ蓋シ佛朗克人ハ羅馬人ヲ
恐怖スルノ念愈薄弱ナルニ從テ愈之ヲ凌虐スルヲ甚
シキナリ

アツベ、ド、ボス氏ハ當時ノ史ヲ脩ムルニ方テ詩客説士

ノ如キ原來時事ニ關係ノ少ナキモノヲ引證セリ抑モ
詞藻ノ美麗ナルハ以テ實録ノ用ニ供シ難キヲ知ラス
ト云フベシ

第四回

何故ニ羅馬ノ法律ハ佛朗克人ニ從屬

セル土地ニ於テ散佚シ却テ我土人不

根底人ニ從屬セル土地ニ遺存シタル

カ

前文ヨリ論シ來ル所ニ依リテ以テ從來五里霧中ニ隱
レタル自餘ノ事實ヲモ明知スルヲ得ヘシ

抑モ現今ノ所謂佛蘭西地方ハ建國第一朝ノ世ニハ羅

馬法律即チ帖阿佗收ノ成典及ヒ此ノ邦土ニ移住セル
諸蕃民ノ法律ヲ運用セリ

佛朗克人ニ從屬スル地方ニテハ撒利律ヲ以テ佛朗克
人ニ施用シ帖阿佗收ノ法典ヲ羅馬人ニ施用シ西我土
人ニ從屬スル所ニテハ亞辣力王ノ命ニ因テ編輯シタ
ル帖阿佗收ノ法典ヲ以テ羅馬人相對ノ爭論ヲ裁決シ
ユーリク王ノ命ニ因テ筆記シタル全國通用ノ慣習ニ
基キテ西我土人相對ノ爭論ヲ裁決セリ爰ニ問者アリ
テ曰フ果シテ然ラハ佛朗克人ノ邦土ニ於テハ撒利律
殆ト國法ノ作用ヲ有シテ羅馬法ハ漸ク衰運ニ傾クニ

際シ特リ西戎土人ノ法制ニ限リテ羅馬法日ニ擴張ノ
勢ヲ得テ終ニ普通ノ法律ト爲ルニ至ル其ノ故如何ヲ
答テ曰フ佛朗克人ノ中ニ羅馬法ノ廢絶シタル所以ハ
蓋シ之ヲ遵用スルヲナク唯タ其ノ佛朗克人タリ蕃民
タリ或ハ撒利律ニ從フ人タルニ因テ莫大ノ利益ヲ享
ケ得ベキカ故ニ各人競フテ羅馬法ヲ去リテ撒利律ニ
就キシナリ然ルニ僧侶ニ至テハ一朝法律ヲ改メテモ
別ニ其ノ分限ニ裨益スル所ナキヲ以テ依然トシテ舊
法(即チ羅馬法)ニ安堵セリ右ニ法ノ差別ハ即チ前ニ記
スカ如ク帝ニ贖金ノ多寡ニ過キササルニ僧侶ハ佛朗克

人ト同様ノ特典ヲ持有シタレハ羅馬法ニ因循スルモ
敢テ損益スル所ナク殊ニ談法律ハ原ト基督教ヲ奉ズ
ル諸帝ノ制定ニ係リテ更ニ能ク其身分ニ適當シタル
カ故ナリ

之ニ反シテ西戎土人ノ法律ハ彼此ノ區別ヲ立テス人
事上ノ利益ニ至テモ更ニ羅馬人ニ異ナル所ナキヲ以
テ更ニ羅馬ノ舊法ヲ棄テ峨土ノ新律ニ遷ルヘキ理由
ナレ是レ西戎土ノ地方ニ羅馬法ノ遺存スル所以ナリ
益々考證ノ功ヲ積ムニ從テ益々其ノ事實ノ確乎トシテ動
カサルヲ證スベシ根の伯爾王制定ノ法律ハ最モ公

平ヲ極ノ人種ノ異同ニ因テ厚薄ノ別ヲ立テス其ノ序
 文ノ意ニ據レハ右法律ハ原ト不氓底人ノ爲メニ制定
 レテ該人民ト羅馬人ノ間ニ生スル爭論ヲ裁決シ法官
 ノ如キモソノ半數ヲ各人民ノ中ヨリ選擇シタリ是レ
 當時ノ政術自ラ然ラサルヲ得サル理由ノ存スル爲メ
 ナリ此ノ事ハ第三十卷第六回ヨリ而シテ不氓底ニ住居
 スル羅馬人相對ノ爭論ヲ裁決スルニハ尚ホ羅馬法ニ
 依遵セシヲ以テ佛朗克ニ於ルカ如ク羅馬人ニ絶テ自
 己ノ法律ヲ放棄スルモノナレ且アゴバルドヨリ虔王
 路易ニ贈レル書柬ニ據テ不氓底地方ニハ曾テ撒利律

ヲ採用セサルヲモ亦見ルヘシ

アゴバルドカ不氓底ノ地方ニ撒利律ノ施行アラント
 ヲ該王ニ請求スルヲ見レハ以テ當時未タ之ヲ採用セ
 サルヲ知ルヘク又我カ佛國ノ州郡ニテ曾テ不氓底ニ
 隸屬セシ所ハ今日マデ尚ホ羅馬法ヲ遺存セリ

我土人ノ占據セル地方ハ齊シク羅馬峨土ノ二法ヲ遵
 用シ絶テ撒利律ヲ採取セズ而モ百賓王甲列馬爾的王
 カ撒拉斯人ヲ掃攘セシ時ニ該王ニ降服セル州府ヨリ
 舊ニ仍テ自己ノ法律ヲ遵用セシヲ請願シテ允裁ヲ
 得タレハ當時ノ諸法律ハ皆ナ治身律タルノ慣習アル

之ヲ施用スル人ノ誰何ヲ問ハズシテ可ナリ

第五回 同上

ゴンタバルド王制定ノ法律ハ羅馬法ト俱ニ久シク不
根底人ノ遵用スル所ト爲リテアゴバルドノ書柬ニ據
レハ虔王路易ノ時代マデ尚ホ未タ廢絶セサルヲ見ル
ニ足レリ又ピスト府ノ諭令ニハ西峨土人ノ占得セル
州郡ヲ羅馬法遵用ノ地方ト稱シタルハ始終西峨土ノ
法律ヲモ齊シク施行セシヲ知ルヘシ其ノ事ハピス
ト府ノ諭令頒布ノ後十四年即チ八百七十八年訥王路
易ノ時ニ開キタルトロイノ教法會議ニ因テ明カナリ

時勢ノ推移ニ從テ各國一般ニ諸蕃民ノ治身律ヲ廢止
シ峨土不根底ノ法律モ終ニ其ノ作用ヲ自國ニ保存ス
ルヲ能ハサルニ至レリ

第六回 如何ニシテ羅馬ノ法律能ク倫巴多人

ノ封疆内ニ地步ヲ占メ得タルヤ

事蹟一トシテ皆ナ予カ論理ニ符合セサルハ死シ其ノ
故ハ倫巴多人ノ法律ハ偏頗ノ弊ナキヲ以テ羅馬人已
カ舊法ヲ捨テ他ノ新律ニ就クノ心ヲ起サ、レハ伊太
利國ニテハ曾テ佛朗克人ニ屈從スル羅馬人ノ如キ思
想ヲ懷クモノ絶テアラズ是レ羅馬法ノ倫巴多ノ法律

ト俱ニ其ノ作用ヲ失墜セサル所以ナリ

倫巴多ノ法律ハ亦タ地步ヲ羅馬ノ成典ニ譲リテ終ニ
 勝國ノ法律タル作用ヲモ失フニ至レリ何トナレハ倫
 巴多ノ法律ハ原トソノ貴族大家ノ遵奉スル所タリト
 雖モ諸府邑興起シテ共和政ヲ行フニ及テ貴族大家或
 ハ其ノ慣習ヲ改メ或ハ滅亡シテ存セズ然ルニ其ノ新
 タニ共和政ヲ建タル人民ハ殊ニ格闘審法ヲ准行シ封
 建尚武ノ風俗ヲ遺ス所ノ法律ヲ遵用スルヲ好マス
 加之當時僧侶ハ皆ヲ羅馬法ヲ用キテ勢威ヲ一國ニ振
 フニ依リテ從來倫巴多ノ法律ニ從ヘル人民モ日ニ月

ニ方向ヲ轉シテ羅馬法ヲ遵用スル風習ト爲レリ

殊ニ倫巴多ノ法制ハ羅馬ノ法律ノ如ク規模莊嚴ナラ
 サレハ以テ國人ヲシテ天下一統ノ舊業ヲ追慕セシム
 ルニ足ラス而シテ彼此二法俱ニ共和政ヲ創建スル諸
 府邑ノ爲ノニ憲法創定ノ材料タレハ將タ孰レニ適從
 シテ更ニ有利ナリトスルカ特殊ノ法制ヲ裁決スル倫
 巴多ノ法制ヲ取ルカ抑モ普通ノ作用アル羅馬法ニ從
 ハンカ其ノ羅馬法ヲ採ルヘキハ言ヲ俟スシテ知ルヘ
 キナリ

第七回 如何ニシテ西班牙ニ於テ羅馬法ハ滅

絶セシカ

西班牙ニ於テハ事情全ク相反シテ獨リ西峨土ノ法律
ノミ遺存シテ羅馬法ハ湮滅セリチヤインダスイント
ス王六百四十
二年踐祚レセスイントス王ハ更ニ諸法院ニ於テ
羅馬法ヲ援引シテ裁判ヲ下スヲ禁止シレセスイン
トス王ハ亦々法律ヲ制定シテ峨土人羅馬人交婚ノ禁
令ヲ解キタリ此ノ二法ハ俱ニ全一ノ精神ニ出テ而メ
レセスイントス王ノ趣意ハ全ク兩國民ヲ分隔スル所
ノ原因ヲ排除スルニ在リ蓋シ當時交婚ノ禁令ト各自
ノ法制ヲ奉スル自由トヲ以テ彼此ヲ區別スルノ著シ

キモノト思惟シタレハナリ

西峨土諸王ハ既ニ國內ニテ羅馬法ノ通用ヲ禁制セシ
ト雖氏高盧ノ南部ニ在ル領地ニ於テハ依然ト相行ハ
レテ止マズ此ノ地方ハ王都ヲ距ルヲ遼遠ナルヲ以テ
號令速カニ達セス人民大ニ自治ノ風ヲ成セリ又六百
七十二年ニ即位セルウムバー王ノ本紀ヲ讀ムニ該地
方ノ土民屢蜂起シテ政府ニ抵抗シ頗ル駕馭ノ術ニ窘
シミ是ヨリ羅馬法盛ニ流行シテ峨土律自ラ衰微セリ
蓋シ西班牙ノ法律ハ土民ノ風俗ニ相應セス實際ノ情
況ニ適切ナラサレハ羅馬法ハ自由ノ精神ヲ含蓄セリ

トシテ甚タ之ヲ愛慕シタルニ由レリ加之チヤインダ
スイントス、レセスイントス二王ノ法律ニハ苛刻ナル
規則ヲ設テ當時高盧ノ南部ニテ氣焰甚ク熾盛ナル猶
太宗徒ヲ壓制シウムバー王ノ本紀ヲ作レル史家ハ此
ノ地方ヲ指シテ猶太宗徒ノ狹邪ト稱スル迄ニ至レリ
故ニ撒拉斯人ハ土民猶太宗徒羅馬人ノ誘招ニ應シテ
大舉入寇シ遂ニ志ヲ逞クスルニ及テ峨土人ハ政權ヲ
握ルノ故ヲ以テ首トシテ其ノ凌虐ヲ被ムリケレバ禍
ヲ避ケテ西班牙ノ本部ニ退去シ而シテ高盧ノ南部ニ
留リテ西峨土ノ法律ヲ遵用スルモノ自然ニ減少セリ

第八回 偽作ノ集會法例

ベネダクトス、レフダハ西峨土ニ於テ羅馬法ヲ停止セ
シ所ノ法制ヲ改竄シテ以テ甲列曼帝制定ノ集會法例
タラ使メンヲ企テタリ賤惡スヘキ撰述者ト謂フベ
シ氏ハ此ノ特殊ノ功令ヲ改竄シテ普通法律ト爲スハ
恰モ宇内ニ蔓延セル羅馬法ヲ根絶スルヲ企ツルニ
異ナラス

第九回 諸蕃ノ法典及ヒ集會法例ノ廢失セル 由來

佛國ニ傳フル所ノ撒利里布利不根底西峨土ノ法律漸

ク衰頽シテ終ニ無用ニ歸シタル情狀下文ニ説ク所ノ如シ

受封ノ地世襲ノ基業ト爲リ陪隸ノ數倍増加スルニ從テ新タニ無數ノ慣例ヲ生シテ已ニ古法舊習ノミヲ墨守ス可ラス然レド人民ノ訴訟ハ概シテ贖金ノ法ヲ用キテ裁斷スレハ未タ全ク古法ノ精神ヲ遺失セシニ非スト雖モ貨幣ノ低昂ニ應シテ贖金ノ額數ヲ増減シ而シテ往々古文書ニ見ルカ如ク主公〔按〕有土ノ貴族ニシテ受封ノ臣ヲ畜ノモノ即チ各自ニ其ノ法衙ニ收納スベキ贖金ノ額數ヲ地頭ナリ一定シタリ是レ時勢ニ應シテ法律ノ精神ヲ活用シ敢

テ其ノ文辭ヲ固執セザルノ明徴ナリ

加フルニ佛國ヲ瓜分シテ數百ノ侯伯ヲ封建シ大小侯伯ハ唯タ封土ノ義務上ヨリ王室ニ服從スルノミニテ固ヨリ政權ノ以テ能ク之ヲ約束制令スル所ニ非サレハ畫一ノ法律ヲ頒敷シテ全國必行ノ效ヲ收ムルハ決シテ當時ニ望ム可ラサルニ依リテ從來王室ノ特命ヲ以テ欽使ヲ州郡ニ派遣シテ訟獄ノ判斷ヲ監視シ政務ノ舉行ヲ察訪スルノ慣例自ラ停止シ若シ新タニ一侯國ヲ封建スルヲアレハ其ノ地方ハ忽チ直隸ヲ離ル故ニ王室ヨリ巡察欽使ヲ派遣スルヲ能ハス其ノ封建ノ

勢既ニ成リテ牢固破ル可ラサルニ迄テハ朝廷ノ功令
絶テ侯伯ノ間ニ行ハレス一國ニテ普ネク遵守スヘキ
法律ハ全ク陵夷シテ地ニ墜タリ

是故ニ撒利不垠底西峨土ノ法律ハ我カ王室第二朝ノ
末世ニ衰兆ヲ現シ第三朝ノ初世ニ至テ殆ト痕跡ヲ存
セサルノ景況ナリキ

第一朝第二朝ノ頃ニハ數國會ヲ開キテ侯伯僧侶ヲ召
集セシテアレハ平民ハ未タ之ニ參與スルヲ能ハス蓋
シ當時僧侶ハ勝國主ノ佑護ニ仗リテ教門ノ特權ヲ保
有シ自ラ一種族ヲ成セシカ故ニ右會議ニ於テ之ヲ約

束スヘキ規則ノ制定ニ從事シ其ノ議定セル所ノモノ
即チ所謂集會法例ニシテ下文ニ列述スル四事ハ其ノ
成果ナリ乃チ封土ノ法制ヲ確定シ之ニ准據シテ寺院
ノ收入ヲ辨理セシテ僧俗ノ別益相隔タリテ僧侶ハ遂
ニ諸侯伯ト協定セル改正法令ヲ舉行スルヲ怠棄セ
シテ教會及法主ノ批答命令ヲ彙纂シテ一部ノ成典ヲ
制セシテ及ヒ之ヲ教門ノ寶典ナリト信認セシテ等ハ
四十四年ノ會議ニ佛ノ禿王甲列ハ教正僧官ヲシテ言
ヲ法典ノ編成ニ托シテ國家ノ典章ニ抵抗シ或ハ之ヲ
遵守スルヲ怠棄セシムルヲ勿レト言ヘリ該ニシテ
王ハ他日教門跋扈ノ弊ヲ預見スルモノハ如シニシテ
爾來新建ノ邦甸アルモ王室ヨリ欽使ヲ派遣シテ法律

施行ヲ監察スルヲ能ハサレハ第三朝ニ至テハ更ニ
ニ集會法例ノ一ヲ説クモノ無キナリ

第十四 全上

撒利巴威畧ノ法律ニ於ルカ如ク倫巴多ノ法律ニモ集
會法例ノ數款ヲ附加シタル理由ヲ究メ知ルハ古法
ヲ考索スルノ一要事ニシテ傍岐ニ涉ラス自ラ右法律
ノ中ニ就テ其ノ端緒ヲ覓メサル可ラス抑モ集會法例
ハ一種ニ止マラス或ハ政治ニ關涉スルアリ或ハ財務
ニ關涉スルアリ之ヲ概括スレハ教會ノ治法ニ係ルモ
ノ其ノ多キニ居テ民事ニ屬スルモノハ甚タ寥々タリ

而シテ其ノ民事ニ屬スルモノヲ民法(即チ各國民ノ治
身律)ニ附加セルカ故ニ該法例中ニ議定ノ條款決シテ
羅馬ノ法律ニ抵觸スル所ナシト明言シタリ其ノ實ヲ
論スレハ財務教法或ハ政治ニ係ル法例ハ絶テ羅馬法
ニ關係セス特リ民事ニ係ルモノハミ注釋ヲ下シ改正
ヲ加ヘテ増損セル諸蕃民ノ法律ニ密附シテ相離ル、
ナレ然レモ該法例ヲ治身律ニ附加スルカ爲メニ却
テ根本タル集會法例ヲ忘失セリ不文未開ノ世ニ撮要
提綱ノ便法アレハソノ本文ヲ遺失スルハ勢免レサル
所ナリ

第十一回 諸蕃民ノ法典カ羅馬法集會法例ト
齊シク逸失ニ歸セル其ノ他ノ原由

日耳曼ノ諸蕃民羅馬帝國ヲ侵略シテ以來漸ク文字ノ用法ヲ學ヒ知リ羅馬人ニ倣フテ其ノ風俗慣習ヲ筆記シ之ヲ類纂シテ一部ノ成典ト爲セリ然レモ甲列曼ノ死後暗君庸主相續テ王位ニ登リ加フルニ内憂外患交起リテ文運教化一時ニ却退シ勝國ノ人民再ヒ蠻俗ノ舊ニ復スルニ迫テ更ニ讀書寫字ノ術ヲ修ムルモノ無シ是レ佛日二國中ニ羅馬及ヒ諸蕃民ノ法律集會法例ノ廢絶セル所以ナリ之ニ反シテ伊國ハ法主及ヒ東帝

ノ君臨スルアリ并ニ自主ノ府邑アリテ貿易ヲ營ミ以テ大利ヲ專占シ頗ル繁榮ヲ極ムルニ因リ文獻典例ノ此ノ國ニ保存セラル、モノ亦タ尠ナシトセズ佛國ノ封域中ニ在リテモ其ノ境ヲ伊國ニ接シ原ト我土人不垠底人ニ服從シタル高盧ノ諸州ニハ一地方ニ限リテ一種ノ特例ト爲リテ羅馬法ノ遺存スルヲ視ルヘシ據此觀之西班牙ニ於テ西我土ノ法律廢絶セルハ全ク文書ノ殘缺ニ起因シ而シテ法律遺失スルニ由テ一般ニ慣例風俗ニ依遵スルニ至リシナルベシ
既ニ治身律一廢地ニ墮テ以來法典ノ明文ニ依ラズ專

ラ慣例ニ準據シテフレドヲト稱スル一種ノ法書ヲ集
成シタリ然レハ則チ諸蕃民カ立君政ヲ建立スルニ因
リテ日耳曼ノ風俗慣習一變シテ成文律ト為リ未タ久
シカラスシテ成文律再ヒ不文律ノ古ニ却退セリ

第十二回 郷慣土俗羅馬及ヒ諸蕃民ノ法律ノ
沿革

郷慣土俗ノ流行既ニ我カ王室ノ第一朝第二朝ノ世ニ
盛ナリシ一ハ古典舊碑中ニ往々土俗舊習慣例法律等
ノ文字ヲ刻記スルヲ見テ知ルヘシ或說ニハ古書中ノ
所謂慣例ハ即チ諸蕃民ノ法律ニシテ故ラニ法律ノ名

ヲ下セルモノハ即チ羅馬ノ成典ナリトスレモ未タ以
テ信據トスルニ足ラス何トナレハ百寶王ノ制令ニ若
シ法律ノ明文アラサレハ慣習ヲ遵用スルモ妨ケナシ
ト雖モ法律ヲ措テ專ラ慣習ニ偏ス可ラストアルニ據
テ考フレハ或說ニ惑フテ羅馬ノ法律ヲ以テ諸蕃民ノ
法典ノ上ニ出ツヘキ一層ノ効力アリトスルキハ一概
ニ古典舊碑ノ遺文ヲ抹殺スルニ當リテ速了ノ謬見タ
ルヲ免レス況ヤ又諸蕃民ノ法典中ニ其ノ決シテ然ラ
サル所以ノ明徴乏シカラサルニ於テヲヤ
諸蕃民ノ法律ハ決シテ郷慣土俗ニ非ス却テ之ヲ誘引

スル所ノ治身律タリ譬ヘハ撒利律ハ原ト治身律ニ係
 レル撒利族ノ佛人ノ居住スル地方ニ在リテハ殆ト普
 通法律ノ作用ヲ有シテ終ニ右地方ノ法制ト爲リ其ノ
 治身律タルノ效力ハ特リ他所ニ住居スル佛人ノ上ニ
 發作スルノミ故ニ若シ撒利律地方ノ法制ト爲レル所
 ニ於テ不埒底人阿列曼人羅馬人ノ如キ華夷雜居シテ
 爭訟ヲ起スヲアレハ各本籍ノ治身律ニ依準シテ是非
 曲直ヲ判斷シ而シテ其ノ讞文ノ中ヨリ該地方ノ法律
 ニ適切ナル部分ヲ採用シ以テ數多ノ新例ヲ作為セリ
 以上百賓王ノ憲法ヲ説明スル所ナリ故ニ此等ノ慣例

能ク該地方ニ住居シ而モ撒利律ノ裁判ヲ受ケサル佛
 人ヲ約束シ得ヘキハ固ヨリ理ノ當然ナレル決シテ之
 ヲ以テ撒利律ヲ左右スヘキノ理ハアヲサルナリ
 故ニ各地ニハ制定ノ法律アリ而シテ若シ法律慣習ノ
 二者互ニ抵牾セサルキハ舊慣古例ヲ用キテ以テ法律
 ノ缺漏ヲ補綴セリ

舊慣古例ハ亦タ以テ一地方ニ限ラサル所ノ法律ヲモ
 補足スルコナキニモアラズ茲ニ其ノ一例ヲ擧ケンニ
 撒利律慣用ノ地方ニ於テ本籍ノ法律ニ依テ不埒底人
 ヲ裁判スルニ方リテ若シ其ノ法律中ニ應當ノ明文ヲ

見ザルキハ則チ右地方ノ慣例ニ從テ之ヲ裁決スルノ
外アラサルハ疑ヲ容レサル所ナリ

百賓王ノ世マデハ當時ノ慣習ニシテ未タ曾テ法律ニ
齊シキ作用ヲ有スルモノアラザリシカモ爾後幾クナ
ラス法律衰微シテ遂ニ慣習ノ蠶食スル所ト爲リ殊ニ
新定ノ規則ハ概ネ目下ノ弊ヲ鑒治スルノ效アレハ人
心漸ク舊法ヲ厭フテ新例ヲ喜フノ情アルハ已ニ百賓
王ノ時ニ端緒ヲ開クト思考セサルヲ得ス

前文ニ論スル所ニ據テ以テ羅馬法ノ作用夙ニ縮退シ
一變シテ地方ノ規律ト爲リシ所以ハ之ヲピスト府ノ

制詰ニ於テ觀ルカ如ク且ツ峨土ノ法律依然トシテ作
用ヲ失セサル所以ハ之ヲトロイスノ法會ニ於テ視ル
カ如シ而シテ羅馬法ハ普通ノ治身律ト爲リ我土法ハ
特別ノ治身律ト爲リシカ故ニ終ニ羅馬法ハ一州一郡
ニ限ルコトハナレリ問者アリ曰ク羅馬法ハ往々西
峨土不根底ノ州郡ニ流傳シテ一地方ノ制度タルニ特
リ諸蕃民ノ治身律ノミ全ク廢絶レテ全國ヲ通シテ其
ノ痕跡ヲ見ル可ラサルハ何ノ故ソ答テ言フ羅馬法ト
雖モ僅カニ一片ノ餘燼ヲ存スルニ過キス其ノ作用ヲ
失スルニ至テハ殆ト諸蕃民ノ治身律ニ異ナラス果シ

テ羅馬法ヲシテ作用ヲ失墜スルヲナカラシメハ今日
羅馬法ノ行ハル、地方ニ於テハ入斯底居安ノ法典ヲ
遵用セス必ステラドシェースノ法典ヲ遵用スルヲ見
ルハキニ更ニ此ノ事ナキハ蓋シ此ノ地方ハ僅カニ羅
馬法ヲ遵用セシ時ノ地名ト其ノ人民カ自己ノ法制ヲ
愛重スル性質就中之ヲ特准ト思惟スルニ方テト及ヒ幽カニ記憶ニ存
スル羅馬法中一二ノ章程トヲ除キテ他ニ文物ノ視ル
ヘキモノアラサルナリ然リト雖モ入斯底居安法典ノ
頒布ニ際シテハ其ノ影響ヲ生スルヲ齊シカラス峨土
不根底ノ如キ羅馬法未タ全ク滅絶セサル諸州ハ成文

律ト看テ之ヲ接受シタルモ原來佛人ノ占據セル地方
ニ在テハ之ヲ法理ノ一書ト認ムルニ過ギザリキ

第十三回

撒利律即チ撒利ニ住居スル佛人ノ

法律及ヒ里布利ニ住居スル佛人ノ

法律ト諸蕃民ノ法律トノ差別

撒利律ハ互證ノ慣例ヲ准許セス若シ甲ヨリ乙ニ對シ
テ要償ノ訟ヲ起シ或ハ其ノ罪惡ヲ告發スルヲアレハ
甲ハ法律上ヨリ其ノ證據ヲ示サルヘカラスト雖モ
乙ハ各國普通ノ法理ニ從テ其ノ然ラサル所以ヲ證明
スルヲ得ス

里布利ニ住メル佛人ノ法理ハ之ニ反シテ反證ノ言ヲ
聽受スルヲ以テ被告ハ數名ノ證人ト齊シク誓詞ヲ立
テ、原告ノ告訴セル義務或ハ罪狀アラサル旨ヲ辨解
スルヲ得ヘシ右誓詞スヘキ證人ノ員數ハ事件重大ナ
ルニ從テ増加シ往々七十二人ノ多キニ至ルアリ

阿列曼巴威略、突林克弗利斯薩遜倫巴多、不根底諸蕃民
ノ法律モ亦タ大同小異アルニ過キス

撒利律ニ反證ヲ許サルハ既ニ前ニ論スルカ如シ
ト雖モ復タ一定ノ事情ニ依リテ之ヲ許スアリ然ル
時ト雖モ決シテ偏證ヲ聽受セズ必ス原證ト對審スル

ヲ要ス譬ヘハ原告其ノ訴訟ヲ確實ナラシメンカ爲メ
ニ證人ヲ以テ陳述スル所アレハ被告モ亦タ我カ證人
ヲ出シテ其ノ然ラサル證左ヲ示ス是ニ於テ法官ハ兩
造ノ誓詞ヲ比較シ而シテ後チ事實ノ曲直ヲ裁判ス此
ノ慣習ハ大ニ里布利及ヒ諸蕃民ノ法律ト其ノ趣ヲ殊
ニセリ右諸法律ニ於テハ本人無罪ノ誓ヲ為シ且ツ親
族ニテ其ノ真實ノ旨ヲ保證スレハ被告ノ罪ヲ釋シテ
更ニ問フヲナシ要スルニ斯ノ如キ法律ハ特リ朴素正
直ノ人民ニアラサレハ施用スヘカラサルカ故ニ制法
者ハ已ムヲ得ス時勢人情ニ應シテ適當ノ方法ヲ規畫

レ以テ其ノ濫妄ニ流ル、ヲ杜絶スルニ至レリ詳細ノ理由ハ下文ニ明カナリ

第十四回 其ノ他ノ差別

里布利及ヒ諸蕃ノ法律殆ト皆ナ格闘審法ヲ准行スレ氏特リ撒利律ノミ之ヲ許サス予カ竟見ニ據レハ格闘審法ハ自然免カル可ラサル結果ニシテ反證ヲ承認スル法律ノ弊ヲ救フニハ唯タ此ノ一事アルヲ特ムニ過キス其ノ故何トナレハ原被訴訟ノ曲直ヲ法庭ニ争フニ際シテ若シ被告巧ニ誓詞ヲ立テ以テ法網ヲ脱センヲ謀ル時ハ該人民ノ如キ尚武ノ風俗ニ在テ原告タ

ルモノ腕力ヲ捨テ、更ニ何ノ手段ニ依リテ能ク其ノ受ケ得タル損害ヲ要償シ犯人ノ偽誓ヲ表白シ得ヘキヤ故ニ反證ヲ許サル撒利律ニハ格闘審法ヲ准行スルヲ免シ之ヲ准行セサルハ更ニ之ヲ必要トセサレハナリ然レ氏里布利其ノ他諸蕃ノ法律ノ如キ反證ヲ受理スルモノニ至テハ之ヲ准行セサルヲ得ス

苟クモ不根底王ゴンダバルトカ此ノ慣習ヲ整理センカ爲メニ制定シタル二章ノ規則ヲ講究スルモノハ必ス其ノ當ニ然ラサルヲ得サル事情ニ由來セシヲ悟了スヘシ殊ニ當時諸蕃民ノ律文ニモ奸猾ノ所業ヲ禦

キテ以テ誓詞ノ惡人ニ汚穢セラル、ヲ救ハサル可ラ
スト記載セリ

倫巴多ノ法律ニ於テモ魯達利王ノ制定ニ係ルモノハ
誓詞ヲ立テ己カ無罪ナルヲ辯明スル人ニ格闘ヲ辯
謝スルヲ聽セリ此ノ慣例漸ク諸方ニ傳播シ為メニ
一種ノ弊害ヲ發生セリ
其ノ因由スル所以ノ事情及ヒ之ヲ挽回シテ再ヒ古俗
舊慣ニ復スルニ至ルヲハ下文ヲ省テ了解スヘシ

第十五回 考論

諸蕃民ノ法典及ヒ其ノ追加規則集會法例ノ改正變革

ヤル來歴ヲ考究スル時ハ格闘審法ヲ准行スルノ慣習
ヲ以テ未タ全ク反證ヲ受理スルノ結果ト斷定ス可ラ
ス或ハ歲月ヲ閱スルヲ久遠ナルヨリ特殊ノ事情ニ應
ジテ特殊ノ法律ヲ設ケ之ニ因テ格闘審法ヲ准行セシ
ナルベシ予カ立論ノ綱領モ亦タ日耳曼人ノ法理其ノ
性質根原及ヒ此ノ法律ニ基キタル故習舊俗ヲ記述ス
ルニ外ナラス

第十六回 撒利律ノ熱湯審法ヲ論ス

撒利律ニテハ熱湯審法ヲ准行ヒリ唯タ其ノ殘酷ニ過
キルヲ以テ法律上ノ方便ニ依リテ之ヲ和諧セリ即チ

熱湯審法ノ試験ヲ受クル為メニ法庭ニ由ル人ヲシテ
其ノ對手原告ト示談ヲ爲サシメ承諾ヲ得テ熱湯ニ入ル
ヘキ手腕ヲ收贖スルヲ許容シ原告ハ法律上規定ス
ル所ノ金額ヲ收メテ被告ヲシテ證人ト齊シク其ノ罪
ヲ犯サ、ル旨ヲ誓言セシム是レ撒利律ニ反證ヲ聽受
スル變則ナリ

右審法ハ原被相對ノ私和ニ成リテ法律ハ之ヲ容認ス
ルノミニテ故ラニ之ヲ命シテ爲サシムルニ非サルノ
ミナラス唯タ原告ヲシテ被告ニ反證ノ辯解ヲ許容シ
一定ノ贖金ヲ收メシムルニ過キス故ニ其ノ被告ノ所

立ノ無罪ノ誓詞ヲ以テ満足スルヤ否ヤハ全ク原告ノ
權内ニアルヲ猶ホ當初ヨリ受ケ得タル損害ヲ容赦シ
テ不問ニ置クヲアルト更ニ異ナルヲナシ

法律上ニ亦タ一ノ調停法ヲ設ケテ訟事未タ完結セサ
ル前ニ被告ハ審法ノ慘酷ヲ恐レ原告ハ贖金ヲ望ムニ
由リテ兩造互ニ和談シテ爭論ヲ息ムルヲ得ヘシ一
タヒ反證ヲ聽受シ遂ニ原被和議ヲ講スルニ至レハ更
ニ法庭ヲ煩ハスノヲナキハ理ノ甚タ睹易キ所タレハ
格闘審法ハ敢テ撒利律ノ變則即チ熱湯審法ニ由來ス
ルニモ非サルナリ

第十七回 我カ先人ノ奇想ヲ論ス

我カ先人カ其ノ臣民ノ榮譽、財産、性命ヲ正理ノ所在ニ
托スルコトナク却テ之ヲ危険ナル勝負ノ孤注ト為シ而
ノ常ニ罪ノ有無ヲ断定スルニ足ラサル證據ヲ信用シ
テ更ニ疑ハサリシハ今日ヨリ之ヲ觀レハ實ニ一奇ト
謂ハサルヲ得ス

蓋シ日耳曼人ハ絶テ他國ノ民ニ征服サレサルニ依リ
テ獨立自主ノ氣象極メテ旺盛ニシテ一部落ノ中ニ在
リテモ異姓別族ハ互ニ抗敵シテ相下ラス若シ人命劫
掠妨害ノ事アレハ忽チ報復ヲ謀リ常ニ腕力ニ仗リテ

鬭爭シ寧處ナキカ故ニ更ニ一定ノ規則ヲ設ケテ私鬭
ヲ申飭シ以テ暴悍ノ風俗ヲ節制セシ以後ハ官憲ノ命
令且ツ其ノ監視ニ非サレハ擅ニ兵刃ヲ交ヘ腕力ヲ較
フ可ラスト議定シタリ之ヲ昔日私鬭ヲ逞クセル獷悍
ノ景況ニ比スレハ大ニ社會ノ改良ヲ進メタリト謂フ
ヘシ

突厥人カ開戦ノ初メニ捷ヲ獲ルコトアレハ則チ自ラ天
佑ヲ蒙ルト喜フカ如ク日耳曼人ハ其ノ私鬭ノ勝負ヲ
視テ以テ天誅差ハス罪惡ニ加ハルコト信用セリ
之ヲ多西土ニ聞ク日耳曼ノ一部落兵ヲ擧ケテ他ノ部

落ヲ討ント欲スル時ハ先ツ一ノ俘囚ヲ索ノテ平民ト
角鬪セシメ其ノ勝敗ニ因テ以テ出軍ノ吉凶ヲトスト
此ニ由テ之ヲ觀レハ一戰ノ輸贏ヲ以テ兩國ノ爭論ヲ
定ムルカ如キ獷狂ノ風俗ニ在リテハ二人ノ強弱ニ因
テ以テ訴訟ノ曲直ヲ判斷スルモ敢テ恠シムニ足ラサ
ルナリ

不氓底王ゴントバルドカ格闘審法ノ准行ニ預カリテ
大ニカアルハ此ノ慘酷ナル法律ヲ定ムル制詰ニ明
カナリ曰ク我カ臣民カ擔詞ニ因テ確知セサル事ト己
カ心ニ信用セサルヲ保證スルノ惡弊ヲ杜絶スルニ

在リト故ニ當時教會ハ格闘ヲ准行スル法制ヲ目レテ
神意ニ犯觸スト揚言シ王室ハ立誓ノ法律ヲ以テ神明
ヲ汚瀆スト認定シ政教ノ間相和セス互ニ駁撃シテ止
マサリキ

格闘審法ハ復タ實驗上ヨリ准行セサルヲ得サルノ理
由アリ何トナレハ尚武ノ國民ハ卑怯未練ヲ一ノ惡德
ト省做レテ以テ教育ノ主義ニ遵ハス榮辱ニ感激セス
法訓制令ヲ服膺セサルノ徵候ト爲シ社會ノ清議ニ容
レラレス人民ニ尊敬セラルハ一ヲ欲セサルモノトシ
テ俱ニ齒セサルカ故ニ苟クモ至賤下愚ニ非サルヨリ

ハ皆ナ才藝ヲ練磨シテ固有ノ膂力ヲ助ケ或ハ形體ノ
力ニ賴リテ無形ノ勇氣ヲ培養セサルハ無シ是レ極メ
テ榮譽ヲ貴重スルヨリ遂ニ力行實踐シテ之ヲ得ンカ
為メナリ況ヤ又專ラ膂力勇氣ヲ尚フ國民ニ於テハ詐
詭狡猾卑怯ニ胚胎スル罪惡ノ殊ニ忌ムヘク惡ムヘキ
ヲ覺フニ於テヤ

火審法ハ被告ノ其手ニ熱鐵ヲ握リ或ハ手ヲ熱湯ニ入
レテ而シテ后チ之ヲ包封シ三日ヲ經テ尚ホ燒痕現ハ
レサレハ乃チ無罪ニ決シテ其ノ人釋放セラルヘシ蓋
シ平生銳ヲ執リ堅ヲ推クニ慣練セル人民ハ體膚極メ

テ頑硬ニシテ金鍊ヲモ敢テ意トセサレハ熱鐵沸湯ニ
觸ル、ト雖モ感覺甚シカラス三日ヲ過クレハ殆ト平
愈スルヲ得ヘク若シ又開封ノ時マテ傷痕尚ホ存スル
カ如キハ其ノ人柔弱ニシテ丈夫ノ氣節ナキ證左ヲ明
示スルニ足レハナリ今日ニ於テモ我カ農民ノ如キ寒
暑ニ暴露セルモノ、手足ハ熱鐵沸湯ニ觸レテモ燒灼
ノ患ナキ而已ナラス婦女ト雖モ朝夕井臼ニ從事スル
モノハ敢テ之ヲ恐ル、トナシ然ルヲ況ヤ當時若シ婦
女ニシテ此ノ審法ニ坐スルトアレハ身ヲ挺テ之ニ代
ルノ俠士ニ乏カラス且ツ奢侈未ダ洽カラサル國民ハ

僅カニ王公ヲ除ケハ其ノ他ハ皆ナ體膚頑硬ニシテ此
ノ審法ニ介意セサルノ人ナルニ於テヲヤ

突林克ノ法律ニ據レハ婦女ニシテ姦罪ヲ犯シ而モ之
ヲ反證シテ無罪ヲ表白スル人ナキ時ニ限リテ沸湯審
法ヲ准行シ里布利ノ法律ニ於テハ一個ノ證人ヲモ出
シ能ハサル男子ニ之ヲ施用セリ蓋シ婦人ニシテ一ノ
親戚アリテ為メニ冤枉ヲ鳴ラスモ無ク男子ニシテ
一ノ證人アリテ代テ品行ノ正直ヲ保證スルモノナキ
カ如キハ即チ其ノ平生親戚朋友ニ疎斥サル、徵候ナ
レハ此ノ一事ヲ以テ有罪ト決スルモ敢テ過酷ニ非サ

ルナリ

故ニ其ノ論ヲ結フニ方リテ予カ將ニ一言セントスル
ハ格闘審法アリ熱鐵沸湯ノ審法アリテ犯罪ノ有無ヲ
判定スル時運世態ニ於テハ却テ法律ノ風俗ニ適當シ
テ相悖ラサルヲ見ル何ソヤ法律ノ平允ヲ失スルニ比
スレハ偏頗ノ弊甚ナキカ如ク其ノ原因(タル法律)ノ善
良ナラサルニ比スレハ頗ル美果ヲ結フカ如ク其ノ公
義ヲ破ルニ比スレハ人ノ權利ヲ害スルヲ鮮ナク其ノ
正理ニ乖クニ比スレハ却テ慘毒ヲ逞クスルヲ鮮ナキ
カ如シ

第十八回 格闘審法ノ確立セル緣由

里昂府ノ敎正アゴバルドヨリ佛王路易第一世ニ捧ケタル奏議ヲ讀ムニゴレデバルド王制定ノ法律ノ弊ヲ痛論セル後ニ不根底ニ於テハ宜ク佛人ノ法律ヲ用ヰテ以テ私人ノ爭訟ヲ判定スヘイトノ文言アルニ據リテ之ヲ視レハ法庭ニ格闘審法ヲ准行セル慣例ハ當時未タ佛人ノ採用スル所ニアラサルカ如レト雖モ又他ノ考證上ヨリ推究スレハ既ニ此ノ慣例ノ盛ニ佛國ニ流行シタルハ苟モ史編ヲ繙クモノ、能ク知ル所ニシテ議論兩岐ニ分レ頗ル人ヲシテ迷惑セシム然レモ

予カ曩キニ論スルカ如ク撒利部ノ佛人ハ此ノ審法ヲ准行セス里布利部ノ佛人ハ之ヲ准行セシトヲ記得スルカハ疑團容易ニ氷釋スヘシ

敎門ノ輿論皆ナ格闘ノ禁斷ニ嚮ヒケレモ其ノ實效ヲ收ムルト能ハス此ノ審法月ニ歳ニ地歩ヲ占メテ佛國一般ノ慣例ト爲レリ而ノ下文ヲ讀ムカハ以テ敎門モ亦タ自ラ幾分力之ヲ激成セルノ實因タリレトヲ理會スヘシ

倫巴多人ノ法律ヲ一閱スルカハ忽チ其ノ證左ヲ認メ得ヘシ阿多帝第二世カ頒定セル憲法ノ序文ニ凡ソ基

業ノ所有權ニ就テ爭論ヲ生シテ眞偽未タ定マラサル
際ニ若シ一方ノ者手ニ聖經ヲ執リテ眞實歟カサル旨
ヲ誓言シテ之ヲ要求スレハ更ニ審問ヲ施スナク所
有ノ權ハ必ス其ノ人ニ歸セスシハアラサルヲ以テ法
庭ニ勝ヲ得ルハ常ニ僞誓ヲ為ス人ニ在リト陳述シテ
古ヨリ流傳セル弊風ニシテ痛恨ニ堪ヘストマテ斷言
セリ紀元九百六十二年阿多帝第一世カ羅馬府ニ於テ
上冕ノ大禮ヲ行フニ際シ恰モ好シ法主我第十二世ノ
命ヲ奉シテ諸國ノ教正該府ニ會議スルヲ以テ伊國ノ
大小侯伯連署シテ此ノ惡弊ヲ矯正スル法律制定ノ目

下ノ急務タル旨ヲ切願シタレハ皇帝法主ハ同意ノ上
ニ此ノ議題ヲ不日將サニラフエナリニ開ントスル
會議ニ付レテ討論セシムヘキニ決定セルニ依リ諸侯
伯ハ直ニ之ヲ該會議ニ建言シタレト辭ヲ特別ノ議員
ノ缺席ニ托シテ依違相決セス其ノ後阿多帝第二世不
根底王コンラットノ兩君伊國ニ赴キテ諸侯伯ヲ召集
シ會議ヲウエロナリニ開クニ及テ諸侯伯反覆シテ改革
ノ舉ノ萬々己ム可ラサルヲ奏請シ於是帝始メテ衆
議ヲ採納シテ一法ヲ制定シテ凡ソ基業ノ紹續ニ係リ
テ爭訟ヲ生シ甲カ其ノ所有權ヲ主張スルニ方リテ若

レ乙タル者之カ反證ヲ明示シテ真實ニアラサル旨ヲ
辨駁スルハ格闘審法ニ因テ以テ其ノ曲直真偽ヲ決
定スヘク又受封ノ地ニ係ル爭論ヲモ此ノ規則ニ依リ
テ裁判スヘク但シ身ヲ敎門ニ歸スル人タリ此ノ規
則ヲ遵奉セサル可ラスト雖モ僧侶ニ限リテ代闘士ヲ
出スヲ許シテ之ヲ俗人ト區別セリ由是觀之當時敎
會ヨリ借用スル所ノ證據法ハ其ノ弊ニ勝ヘサルヨリ
貴族ハ頻リニ格闘審法ノ准行アラント建白シ左ナ
キダニ弊風日ニ增長シテ既ニ世人ノ視聽ヲ掩フヘカ
ラサルニ至リシヲ以テ輿論群起シテ之カ矯正改良ヲ

催促シ遂ニ伊國ニ君臨スル阿多帝ノ威カヲ假リテ始
メテ其ノ志ヲ達スルヲ得タリ然レモ敎會ハ尚ホ抗色
ヲ現シテ爲メニ二回ノ會議ヲ開キタリ之ヲ要スルニ
格闘審法ハ原ト帝王侯伯カ連衡シテ敎會ニ迫リテ要
取セル所ノ獲物ナレハ非理無法ヲ抑防スルノ堡障財
産ヲ保護スルノ要具トシテ貴族ノ特權ノ一部ト看做
シ爾來遂ニ一定不易ノ慣例ト爲レリ然リ而シテ其ノ能
ク敎會ヲ凌轢セシモ絶テ禍亂ヲ惹キ起サ、リレハ全
ク帝威極盛法權未振ノ時ニ際シテ阿多帝カ羅馬ノ皇
位再興ノ爲メ伊國ニ巡幸スルニ乘レテ斷然之ヲ舉行

レタルハナリ

茲ニ餘論ヲ述ヘテ以テ反證ヲ受理スルノ慣例アルニ依リテ格闘審法ヲ准行セシメテ杜撰ノ説ニ非サルヲ解明スヘシ即チ諸侯伯カ連署シテ頻リニ阿多帝第一世及ヒ第二世ニ愁訴シタル弊害トハ縱令真確ノ所有權ナレト認定サル、モ其ノ人若シ聖經ヲ捧ケテ偽冒ニ非サル旨ヲ誓言スル代ハ以テ一身ヲ辯護シテ原告ノ訴狀ヲ抹殺スヘキ一事ニシテ此ノ惡弊ヲ一掃シテ廓清ノ效ヲ得ルハ格闘審法ヲ再興スルノ外他術無キナリ

當時僧俗ニ社會ノ間輯睦セサル形狀ヲ説明スルカ爲メニ阿多帝第二世ノ憲法ヲ略述シタリ之ヨリ先キ倫巴多王魯達留ノ時ニモ同様ノ事弊アリテ良奸相辨セサルヲ以テ真正ノ所有權ヲ保護シテ鞏固ナラシメン

一ヲ冀望シ特ニ法衙ノ録事官ニ命シテ文券ノ膺造ニアラサルヲ誓言セシノ若シ録事官死亡スルニ會ハ署名ノ證人ニ誓詞ヲ為サシムルノ制令ヲ頒定セシ

一アリ然レモ數世ノ積習一朝驟カニ破リ難キヨリ終ニ前文ノ改革ヲ舉行スルニ至レリ

更ニ之ヲ距ル百餘年前甲列曼帝カ召集セル大會議ニ

國民ヨリ現時ノ人情奸詐百出シ法庭上ニテ甲乙相爭
フニ方リテハ兩造ノ中必ス偽誓ヲ作ス者アルヲ免レ
ザレ其ノ真偽ヲ判ツニ由ナシ之ヲ決定スルニハ格
闘審法ヲ再興スルニ若カスト建議シ遂ニ嘉納スル所
トナレリ

格闘審法一タビ不根底ニ確立シテ以來立誓ノ慣例自
ラ退縮シ伊太利王帖阿佗力ハ東峨土人ノ單身格闘ス
ルヲ廢止シ西班牙王チャンダスキント、レセスイン
トノ法律ニ至テハ全ク其ノ精神ヲモ忘失スルノ狀ア
リタレ其高盧ノ南部ニ住メル人民ハ更ニ此等ノ法律

ヲ守ラス格闘審法ヲ其ノ特權中ノ一ト思惟セリ

東峨土人カ希臘人ノ爲メニ滅サレタル後ニ倫巴多人
ハ伊太利ノ全部ヲ略取シテ格闘審法ヲ施行シタレ其
希臘人ノ舊法ノ存スルアリテ多少之ヲ阻抑シテ未タ
普通ノ制度ト爲ラス爾來倫巴多人ノ法律中ニ省ルナ
如ク甲列曼路易阿多ノ諸帝屢憲法ヲ頒定シテ撒利律
ヲ増補シ其ノ初メハ刑事ニ限リテ格闘審法ヲ准行セ
シカ終ニハ民事ニモ之ヲ許行シテ大ニ其ノ區域ヲ擴
張シタリ然レ其物兩全ナル能ハス利ハ弊ノ由テ起ル
所ナレハ原ト反證ノ弊ヲ矯メント欲シテ准行シタル

拾聞審法モ亦タ其ノ弊ニ勝ハサルヲ以テ文ニ法ヲ兼
用シテ時勢人情ノ緩急ニ從テ時々之ヲ更替セリ
而シテ一方ヲ視レハ僧侶ハ一切ノ俗務ニ干涉セサル
無キヲ以テ人民ノ其ノ法壇ニ詣テハ曲直ノ判斷ヲ請
フヲ悦テ揚々得色アリ當時寺院ニテ立誓審法ヲ施
行セリ我カ佛國第一朝ノ項
ニモ禁中特ニ禮拜堂ヲ又一方ヲ顧ミレハ豪族巨室ハ
專ラ兵刃ヲ恃テ其ノ威權ヲ保持セリ
然リト雖モ予ハ斯ク貴族ノ為メニ憎惡セラル、立誓
審法ハ原ト僧侶ノ創設ニ係ルト言フニ非ス此ノ慣例
ハ諸蕃民ノ法理ニ胚胎シテ其ノ反證ヲ受理スルニ淵

源シタリ抑モ反證法ノ應效ハ罪ヲ犯シテ法網ヲ漏ル
ノ弊アルヤ夙ニ識者ノ看破スル所ト爲ルヲ以テ始メ
テ教法ヲ假用シテ罪人ノ心ヲ畏懾シ妄言ヲ箝束スル
ノ治具ト爲セシ以來其ノ慣例法式終ニ僧侶ノ專掌ニ
屬セシナリ其ノ他僧侶カ反證法ヲ嫌忌スルニ因テ其
ノ弊アル知ルヘシ又ボーマノイルノ著書第三十九回
ニモ教會裁判所ハ絶エテ反證法ヲ受理セサルカ故ニ
諸蕃民ノ法典漸ク勢力ヲ失シテ遂ニ廢絶ニ歸シタル
ヲ記載セリ

然レハ前文ヨリ縷々論シ來ルカ如ク反證ノ慣例ト格

闘ノ審法ハ始終密著ノ關係ヲ有シテ相離レサルヲ
斷定スルニ足ルヘク唯タ政務ノ法院ハ反證格闘ノ二
法ヲ併用シ教門ノ法院ハ齋シク之ヲ斥退セルノ別ア
ルノミ

格闘審法ヲ採用セシ以來國民益尚武ノ風ヲ固執シテ
之ヲ神明ノ裁判ナリト崇信ス故ニ從來歸依スル所ノ
十字架熱湯冷水ノ諸審法ハ皆ナ自ラ廢絶シタリ
甲列曼帝ノ法制ニ若シ諸子ノ間ニ爭論起ルヲアレハ
十字架ノ審法ニ依リテ判定スヘシトアレハ路易王第
一世ハ教門ニ係リタル訟事ニ限リテ之ヲ施用シ嗣王

魯達留ニ至テ獨リ十字架ノミナラス併セテ冷水ノ審
法ヲモ廢止セリ

予ハ敢テ各所各異ノ慣習ニ因循セル當時ニ在リテ教
門ニ曾テ此ノ諸審法ヲ准行セストハ斷言シ能ハスト
雖モ^{聯立王與古斯土ノ准}許狀ニ之ヲ記載ス其ノ之ヲ實施セシノ甚タ

寥々タルハ決シテ疑ヲ容ル可ラサルナリ聖王路易ト
同時ノボーマノイル氏各種ノ審法ヲ列舉スル書中ニ
格闘ノ事ヲ記載スルヲ見レバ絶テ一言ノ自餘ノ審法
ニ及フモノ無シ

第十九回 撒利律羅馬法カ集會法例ト俱ニ廢

絶シタル新理ヲ論ス

撒利律及ヒ羅馬法カ集會法例ト齊シク廢絶シタル所以ハ既ニ前ニ論了スル所ノ如シト雖モ茲ニ亦タ其ノ一大原因ハ專ラ格闘審法ノ擴張セシニ由來セシヲ説ントス

撒利律ニハ格闘審法ヲ准行ヤス故ニ格闘ノ流行倍盛ナルニ從テ該法律ハ殆ト無用ニ属シテ亡失セリ羅馬法モ齊シク此ノ慣例ニ依ラサルカ故遂ニ束閣セラレテ之ヲ顧ミルモノナク一國ノ人心專ラ格闘審法ノ章程ヲ立テ之ヲ實施スルニ就テ所生ノ事件ヲ整定スル

一ニ風靡シタレハ集會法例ノ如キモ禁令ヲ下サスシテ自ラ作用ヲ失ヘリスノ如ク古律舊典ハ大抵知ラス識ラスシテ消失シ今日其ノ廢止セル歲月ヲモ徵スルニ由ナク又之ニ代リテ新タニ法律ヲ制定セシヲ見ス

必竟獷狽不文ノ人民ハ成文律ヲ必要トセサルヨリ古律舊典ノ廢絶スルニ更ニ容易ナルヘシ故ニ若シ甲乙ノ國民爭論ヲ生スルニアレハ直ニ一回ノ格闘ヲ試ミ其ノ勝敗ニ依リテ曲直ヲ判斷スルノミナレハ必シモ學識才略ヲ要セサリキ

一トレテ格闘審法ヲ用キサルハナレボーマノイルノ
風俗紀ヲ參觀スヘシ

佛國第三朝ノ初マテ訴訟法ハ全ク一身ノ爭論ニ止マ
リテ榮譽ノ見點ニ基キテ判斷ヲ下スカ故ニ若シ法官
ニ服セサルモノアレハ則チ其ノ人ニ對シテ官威ヲ侮
慢セルノ償ヲ要求スルヲ得ヘシ又ブルガ府ニテハ市
尹ノ召喚ヲ拒テ出庭セサルモノアレハ直チニ一書ヲ

裁シテ「吾レ汝ヲ召喚セシニ汝忽視シテ來衙セス故ニ
吾レ汝ノ侮慢ヲ責メテ満足スル所アラントスト」告示
シテ格闘ヲ挑ムノ慣例アリ其ノ後胖王路易ニ至テ之
ヲ改良シタリ

オルリンス府ノ慣例ハ貸借上ノ訴訟ニモ格闘審法ヲ
准行シケレハ幼王路易ハ諭令ヲ下シテ五「ス」以上
ノ額ニ限リテ之ヲ施用セシメタリ但シ當時十二「デ」ニ
「ル」ヲ超ユレハ頗ル巨額ニ當ルヲ以テ此ノ諭令ハ談
府ノ地方律ト為レリ又ボーマノイルノ言ニ當時佛國
ニ於テハ故ラニ代闘士ヲ傭ヒ置テ訟事ノ起ル毎ニ之

ヲ出シテ格闘ヲ為サシムルノ惡風アルヲ論スルヲ
見タリ是レ格闘審法ノ甚ク流行セシヲ想像スルニ足
レリ

第二十四 榮譽ノ原始

諸蕃民ノ法典ハ恰モ謎語ヲ讀ムカ如ク殆ト其ノ意ヲ
解シ難シ弗利斯人ノ法律ハ杖ヲ以テ人ヲ毆撃スルモ
ノニ僅々半「ス」ノ贖金ヲ要求スルニ過キサレ氏之ヨ
リ更ニ微傷ナル罰ニ却テ大金ヲ納メシム撒利律ニ據
レハ自主民杖ヲ以テ他ノ自主民ヲ毆ツキハ三「ス」
ノ贖金ヲ納メ若シ出血スレハ鋼刃ヲ以テ人ヲ傷ケタ

ル例圖ニ照シテ十五「ス」ノ贖金ヲ納メシム負傷ノ
大小ニ應シテ罰典ニ輕重アリ倫巴多人ノ法律ハ一撃
二撃ヨリ五撃六撃ニ至ルマテ撃數ノ多少ニ應シテ贖
金ヲ増減セリ今日ノ世情ヨリ之ヲ視レハ一撃ノ辱ハ
萬金ノ能ク贖フ所ニアラス

倫巴多人ノ法典中ニ編入セル甲列曼帝ノ憲法ニ「格闘
審法ヲ准行スル時ニハ必ス木槌ヲ用ウヘキ」ヲ掲載
セリ其ノ趣意或ハ敎門ノ人ヲ保護シテ傷害ヲ加ヘサ
ランカ爲メニ然ルカ或ハ格闘審法ノ勢焰其ノ度ニ過
ルヲ抑損センカ爲メニ然ルナルヘシ路易王第一世ノ集

會法例ニハ或ハ真劔或ハ木槌唯タ本人ノ情願ニ任セ
タリ爾來歲月ヲ經ルニ從テ奴隸ヲ除ク外更ニ一人ノ
木槌ヲ用ウルモノ無キニ至レリ

茲ニ各人カ使用スル物具ニ依リテ始メテ貴賤榮辱ノ
別立ツヲ見ルヘシ即チ原告法官ノ面前ニ立テ犯人
ノ罪狀ヲ誓言スルニ若シ被告屈セス之ヲ原告ノ虛言
ナリト答フルハ法官兩造ノ口供ヲ聽キ了リテ格闘
ヲ為サシム蓋シ當時ノ大法苟クモ人ヨリ無實ノ言ヲ
受クレハ必ス之ト格闘セサルヲ得サレハナリ
一タヒ格闘スト斷言スル以上ハ再ヒ之ヲ改ムルヲ

許サス之ヲ犯スモノニハ罰典アリ譽榮上ニ於テ士タ
ルモノ其ノ言ヲ食ムヲ禁スルノ通規ハ茲ニ由來ス
士人ハ全身甲冑ヲ擐シテ馬上ニテ格闘シ奴隸ハ徒歩
シ木槌ヲ執テ相闘フ然レハ木槌ハ賤辱ノ物具ト為リ
若シ之ヲ用キテ以テ士人ヲ毆テハ則チ士人ヲ奴隸視
スルノ罪ヲ犯スモノト認メラレタリ
奴隸ニ非サルヨリハ面ヲ覆ハスシテ格闘スルモノ無
シ故ニ人ノ面ヲ毆ツモノハ乃チ人ニ奴隸タルノ大辱
ヲ與フニ當ルカ故ニ血ヲ流シテ以テ其ノ罪ヲ贖ハサ
ルヘカラス

日耳曼ノ諸族カ極メテ榮譽ヲ貴重スルハ更ニ吾人ヨ
 リモ太甚タシ假令遠親疎族ニ係ルモノト雖モ屈辱ヲ
 伸雪スルノ義舉ニ與スルヲ榮譽トス之ヲ以テ乃チ諸
 法律ノ精神ト為スカ故ニ倫巴多ノ法律ハ誰何ヲ論セ
 ス人ニ耻辱ヲ與ヘ或ハ之ヲ愚弄スル趣意ニテ從僕ヲ
 率キテ人ノ不意ヲ襲撃スルモノハ之ヲ殺セル贖金ノ
 半額ヲ納メテ其ノ罪ヲ謝シ若シ同一ノ趣意ニテ人ヲ
 捕縛スルモノハ全額ノ三分ノ二ヲ納メシメタリ
 我カ先人^{日耳曼人}カ甚タ耻辱ノ一點ニ熱心セシハ此ノ
 法律ニ據テ知ルヘシト雖モ某物ヲ用キテ某部ヲ毆チ

并ニ之ヲ毆ツノ状況如何ニ從テ耻辱ノ大小ヲ定タル
 一ヲ知ラス都テ之ヲ毆打ノ部類ニ概括シ其ノ甚シキ
 ヲ加フニ應シテ耻辱ノ度ヲ増加セリ

第二十一回 更ニ日耳曼人ノ榮譽ヲ論ス

多西土云ク戰場ニ盾ヲ遺シテ身ヲ脱スルハ日耳曼人
 ノ大辱トスル所ナリ故ニ亂軍ノ際之ヲ失フカ為メニ
 往々自ラ其ノ性命ヲ抛ツモノアリ撒利ノ古律ニ若シ
 人ヲ讒謗シ失楯ノ汚名ヲ與ヘテ榮譽ヲ害スルモノハ
 十五^スス^スノ贖金ヲ納メシメタリ

甲列曼帝ハ撒利律ヲ改正シテ十五^スス^スノ贖金ヲ三^ス

一スニ減シタリ帝ノ政術ハ決シテ尚武ノ風俗ヲ抑損
セント欲スルニ在ラサルヤ疑フ可ラサルニ之ヲ増サ
スシテ却テ之ヲ減セシハ蓋シ兵器ノ改革ニ因テ干盾
ノ用敢テ昔日ノ如ク緊要ナラサルニ由ルナルヘシ其
ノ他兵器ノ改革ニ因テ新タニ慣例習俗ノ端ヲ開キシ
モノ少ナカラス

第二十二回 格闘審法ノ景狀

吾人ノ嬌類艷質ニ交ハルヤ一己ノ快樂ヲ謀リ或ハ互
ニ相愛シ相慕フノ幸福ヲ享ケ或ハ女子ハ最モ人ノ態
度ヲ品評スルニ長スルヲ以テ其ノ歡心ヲ得ント欲ス

ルノ希望ニ因ル然リ而シテ歡心ヲ得ント欲スルノ希
望一轉シテ慙慙柔媚ノ言行ト變ス此ノ言行ハ固ヨリ
愛ノ實相ニ非サレモ始終愛ニ伴フテ相離レス其ノ外
形ヲ修飾スルモノナリ

國風時勢ノ循環ニ從テ男女相愛ノ情態同シカラス前
文ノ三項互ニ消長シ其ノ中ノ一項必ス時好ニ投ス格
闘審法盛ニ行ハルノ世ニ在リテハ柔媚慙慙ヲ以テ男
女交際ノ精神ト爲セシテ蓋シ自然ノ勢ナリ

倫巴多ノ法律ニ若シ法官代闘士ノ一人身ニ魔草（接本名）
ルセリ當時世俗ニ之ヲ帶フレ（ハ）魔術ヲ逞タスヘシト云フ。テ容帶スルヲ看出ス所ハ

命シテ之ヲ褫取シ且ツ決シテ密帶セサル旨ヲ誓言セ
シム此ノ法律ハ固ト世俗ノ通説ニ胚胎スル所ニシテ
其ノ迷妄ノ一ニ斯ニ至ルハ蓋シ無中ニ有ヲ生スル畏
懼ノ一念ニ外ナラス然ル所以ノ根柢ヲ尋ルニ代闘士
ハ單身ノ格闘ニ於ルカ如ク全身掣甲シ重大ノ兵器ニ
於ルカ如ク殊ニ強銳ト恃ム所ノモノヲ帶フルハ無量
ノ利アルヲ以テ二三ノ代闘士ニ魔術ヲ行フ者アルノ
説ヲ爲シ其ノ説漸ク多人ニ傳播シテ之ヲ妄信シタル
ナリ

義士俠客ノ奇績偉業モ亦タ全ク其ノ淵源ヲ前説ノ如

キニ發シテ速カニ俚耳ヲ驚カレテ夫ノ危險ヲ尋テ周
遊スル豪傑鬼神ヲ役使スル術士仙境ノ神女翼駒靈馬
目ニ視ルヘカラス、兵刃傷ク可ラサルノ神人、大人英雄
ヲ教育スル仙士、着妖驅妖ノ宮閣、現世中ニ湧出スヘキ
新世界等怪誕不替ノ説ヲ捏造シ之ニ臆見ヲ附會シテ
却テ事物自然ノ運行ヲ賤輩下流ニ委ネテ考究セサル
ナリ

冒險ノ武士ハ常ニ甲冑躬ヲ固メテ城壘林立ノ間ヲ周
遊シ強盜暴客ヲ索メテ之ヲ懲懲シ強ヲ擠キ弱ヲ扶ク
ルヲ無上ノ榮譽ト認取ヒリ故ニ中古ノ事ヲ記スル稗

史ハ皆ナ愛情勇氣文、發作シテ女流ニ佞媚スルノ紀傳
ニアラザルハ死シ

淑女麗人ノ眼前ニ在テハ更ニ危險ヲ冒スヲ憚ラヌ
一命ヲ餌ニシテ其ノ歡心ヲ釣ルヲ以テ非常ノ男子ト
為ス斯レ當時ノ世論ニシテ女流ニ佞媚スルノ原始ナ
リ我カ小説類ニ噴々トシテ女流ニ佞媚スルノ快樂ヲ
稱讚セシヨリ遂ニ歐土ノ人心慷慨相尚フノ風俗ニ馴
致セリ蓋シ古人ノ稀ニ知ル所タリ

羅馬ノ繁華富驕ハ淫蕩遊冶ノ媒因ト為リ希臘ノ無事
泰平ハ男女相愛ノ情感ヲ煽起シ中古以來淑女ノ徳ヲ

保護シ麗質艷容ヲ愛敬スル任侠ノ氣節ヲ一變シテ遂
ニ女流ニ柔媚スルノ風俗ヲ成セリ

武技ノ優劣ヲ比較スルノ假戰ハ勇氣愛情ヲ稠人ニ表
揚スルノ機會ナルカ故ニ其ノ行ハル、ニ從テ益優柔
佞媚ノ風習增長シタリ

第二十三回 格闘審法ノ成規

格闘審法ノ如キ憎惡スヘキ慣例ニ主義ヲ設ケ之カ規
則章程ヲ立ルヲ見テ或ハ奇異ノ思ヲ作スモノアラシ
抑モ人ハ大體ノ理ニ明カナレモ亦タ弊習ニ因循シ之
ニ據リテ一定ノ規則ヲ編制スルモノナリ夫レ道理ニ

皆キ公義ニ悖ルノ甚タシキ格闘審法ノ右ニ出ルモノアリヤ必ス有ラサルヘシ然レモ一旦之ヲ准行スルニ至レハ之ヲ實施スルニ就テ慎密ノ約束ヲ設ケテ之ヲ遵守セサル可ラス
當時ノ訴訟法ヲ熟知セント欲セハ必ス先ツ大ニ之ヲ改革シタル聖王路易ノ制規ヲ讀マサル可ラス同時ノ學士ニハデフオンテンスアリ其ノ後ニハボーマノイル等輩出スルヲ以テ此ノ改革法ヲ讀テ以テ當時ニ實施セル法制ヲ考索スヘシ

第二十四回 格闘審法ノ定則

訴人數名ナルモ其ノ中一人ヲ撰ミテ原告ノ事ヲ攝行セシム若シ協議ノ上ニテ相決セサレハ問官ヨリ命シテ一人ヲ撰マシム
士人ヨリ奴隸ニ格闘ヲ挑ムモ盾ト木槌トヲ執リ徒歩シテ場ニ上ルヲ常例トス若シ馬上甲冑ヲ撰シ士人ノ裝束ヲ著シテ出場スルヲアレハ先ツ馬ヨリ下シ兵仗ヲ取リ甲冑ヲ脱セシノ奴隸同様ノ衫衣ヲ與ヘテ格闘ヲ為サシム

開戦ノ前宰官ハ三四ノ蹄令ヲ出シテ衆人ヲ警シム第一回ノ蹄令ニテ闘士ノ親戚ヲ場外ニ退出セシノ第二

因ニテ衆人ノ雜沓ヲ制止シ第三回ニテ闘士ニ助力スルヲ嚴禁ス若シ之ヲ犯スハ其ノ人ヲ罰スルノミナラス之ニ依リテ一方ニ殺傷アレハ死刑ニ處シテ救スヲナシ

宰官ノ屬吏戰場ノ周圍ヲ警衛ス若シ闘士ノ一人ヨリ和議ヲ乞フ旨ヲ陳述スルハ雙方ヲ止メテ現時ノ闘狀實況ヲ審カニ視察シ然ル後之ヲ和解ス是レ和議整ハス再ヒ鋒ヲ接スルニ至テ原ノ位地ニ復セシモンカ爲ノナリ

犯罪若クハ偽告ノ證據判然トシテ疑ヲ可ラサルハ

主公ノ承諾ヲ經サレハ兩造私ニ其ノ訴訟ヲ完結スルヲ許サス又勝敗已ニ決スル後ハ州牧ノ免狀ヲ得サレハ和議ヲ講スルヲ許サス

然レモ若シ主公賄賂ヲ貪リテ大罪ヲ犯セル人ニ和議ヲ講スルヲ承諾スル時ハ六十リ^リフルノ罰鍰ヲ納メシメ而シテ犯人懲罰ノ權ハ州牧ノ掌握ニ移ル人ニ格闘ヲ挑ミ能ハス又之ニ應シ能ハサルモノ鮮ナカラス此ノ輩ニハ代闘士ヲ傭用スルノ特權ヲ付與セリ而シテ人ニ代テ闘フモノ若シ敗ヲ取レハ其ノ罰トシテ一手ヲ截ラル、カ故ニ恰モ自己ノ利害ニ係ルカ

如ク傭主ノ為ニ盡力セサルハ無シ

今ヲ距ル百年前ニ嚴法ヲ設ケテ格闘ヲ禁止セル片ニハ武技勇力ノ根本ヲ奪フテ足レリトシ犯者ノ手ヲ截斷セリ之ヲ要スルニ人類ノ憂苦ハ一身ノ長所ヲ喪ヒ不具トナリテ生存スルヨリ甚シキハ無シ

大事件ニ於テ兩造各代人ヲ傭ヒ格闘ヲ為サシムル片ニハ戰狀ヲ見サル所ニ本人ヲ拘留シ而シテ本人ヲ縛スル所ノ繩索ハ即チ若シ代人格闘ニ勝サル片ニハ本人ノ所刑ニ用キル所ノモノナリ

格闘ニ勝サルモ敢テ全局ノ失敗ト為ルニ非ス譬ヘハ

示談ニ付スヘキ一事ニテ相闘フ時ハ唯タ示談スヘキ一事ヲ失フノミ

第二十五回 格闘審法ノ區域

瑣細ナル民事ニ就テ格闘ノ約ヲ授受スル片ハ主公兩造ヲ諭シテ解止セシム

譬ヘハ通衢ニテ人ヲ刺殺スルカ如ク事實甚タ著明ナル片ハ證左ヲ審問セス格闘ヲ施行セス法官直チニ事實ニ據リテ罪案ヲ判決ス

若シ主公ノ法院ニ於テ前例ヲ照シ訴訟ヲ判決シテ衆人ノ了知スル慣例ト為ル片ハ格闘ノ勝敗ニ由リテ成

例ヲ破ラサルカ為メニ兩造ニ格闘ノ特權ヲ准許セサルヲ得ヘシ

自身若クハ家族若クハ封土ノ為メニ非サレハ格闘審法ヲ要求スルヲ得ス

既ニ被告ヲ放釋セル後ハ他ノ親族ヨリ格闘ヲ挑ムヲ許サス然ラサレハ爭論完結ノ期ナカルヘシ

若シ一旦訟事完結セルノ後親族アリテ本人ノ横死ヲ疑ヒ復讐ノ事ヲ公衆ニ訴フト雖モ更ニ格闘ヲ許スノ理ナシ又事實ヲ明示スヘキ確證ナキハ於テモ然リトス

若シ重創ノ為メニ死スルモノ被告ノ無罪ヲ述ヘテ更ニ他人ヲ指名スルハ格闘ヲ准行スルヲナシ然レモ若シ唯モ無罪ヲ述フルニ止マリテ他ニ指名セサルハ之ヲ臨終ノ赦免ト認ムルノミニテ更ニ爭訟ヲ中止セス紳士ノ如キニ至リテハ互ニ兵ヲ起シテ相戦フトアリ

若シ開戦ノ際親族ノ一人格闘ノ約ヲ為シ或ハ之ニ應スルハ戰權忽チ止ム何トナレハ一タヒ格闘ヲ約スル上ハ彼我俱ニ兵ヲ收メテ曲直ヲ法律ニ訴フト欲スト認取スレハナリ故ニ爾後尚ホ戦ヲ止メサルモノ

ハ損害賠償ノ責ニ任セサル可ラス

是故ニ格闘審法ヲ准行スレハ兩黨ノ公戦ヲ變シテニ
私人ノ格闘ト爲スト法院ノ威權ヲ復興スルト及ヒ公
法ニ非サレハ治メ能ハサル人ヲ約束シテ民法ニ服從
セシムルトノ利益アリ

惡法ノ中ニ往々善蹟アルヲ看出スハ猶ホ衆美ノ中ニ
拙アルヲ免レサルカ如シ

若シ人アリ犯罪ヲ以テ告訴セラレ而シテ其ノ罪ハ告
訴者ノ自ラ犯ス所ニ係リテ證據顯然トシテ掩フ可ラ
サルキハ格闘審法ヲ准行スルヲ無シ是レ罪人ニアラ

サルヨリハ一定ノ刑罰ヲ避テ預シメ勝敗ヲ知り難キ
格闘ヲ好ムモノ有ラサレハナリ

中裁人ニテ決定セル事項ト教會裁判所ノ判斷ト及ヒ
婦人ノ得分ニ係ル案件トニ就テハ格闘ヲ准行セス

ボーマノイルノ言ニ婦人ハ戦フヲ能ハスト若シ婦人
代闘士ヲ定メスシテ人ヲ告訴スルキハ格闘ヲ約諾セ
ス又婦人ハ必ス其ノ主公即チ夫ノ承諾ヲ得スシテ原
告タルヲ能ハス但シ之ヲ被告トスルニハ夫ノ承諾ヲ
要セス

原被俱ニ齊シク十五歳未満ノ人ハ格闘ヲ爲レ能ハス

然レモ孤子ニ係ル爭論ニシテ若レ後見人或ハ受托者
甘シテ此ノ審法ノ危険ヲ冒スキハ之ヲ命スルヲ得ヘ
シ
奴隸ト格闘スルヲ許サル、人ハ即チ他ノ奴隸新タ
ニ士民ノ籍ニ入リシ者及ヒ原告タル紳士是レナリ然
レモ若シ奴隸自ラ原告タルキハ紳士ハ之ヲ拒ムノ權
アル而已ナラス奴隸ノ主人之ヲ肯シセスレテ法廳ヲ
退カシムルヲ得ヘシ但シ主人ノ特免狀ヲ所持シ或ハ
其ノ慣例アレハ自主民ニ格闘ヲ挑ムヲ得ヘシ又寺院
ニ於テモ其ノ奴隸ニ對セル威權ヲ世人ニ示サシカ為

ノ主人同様ノ權アルヲ主張セリ

第二十六回 原被ノ一人ト證人トノ格闘審法

ヲ論ス

ボーマノイルニ聞ク、曰ク、若シ人アリ證人ノ誓詞自己
ノ利益ヲ害スルト認ムルキハ乃チ對手タルモノ偽證
ヲ立テ己ヲ誣告スル旨ヲ法官ニ陳述レテ第二證人ノ
對審ヲ止ムルヲ得ヘシ若シ證人其ノ言ノ真確ヲ保證
セント欲スルキハ直チニ格闘ノ約ヲ挑ムヘシ而シテ
格闘ノ上ニテ證人ノ失敗ニ歸スレハ偽證ノ訴告ナリ
ト判決セラレテ其ノ非理ニ歸スルカ故ニ更ニ審問ヲ

要スルヲ無シ

若シ第二證人ノ口述ヲ聽クヲ肯スルハ復證ノ訴
訟トシテ判決セラル、ヲ以テ之ニ先ナテ第二證人ノ
擔言ヲ止メサル可ラス已ニ第二證人ヲ止ムレハ第一
證人ノ口證ハ無效ノモノニ屬ス

斯ク第二證人ヲ止ムル上ハ原告ニ他ノ證人ヲ出ス
ヲ許サス全ク其ノ非分ニ決ス然レハ格闘ノ約ヲ爲サ
ザルハ他ノ證人ヲ出スモ妨ケ无シ

ボーマノイルノ說ニ據レハ證人證據ヲ述フル前ニ本
人ニ對シテ我ハ敢テ汝ノ爭證ニ就テ格闘スルヲ厭

ハス何等ノ論題ヲモ辯論スルヲ厭ハス汝果シテ甘
心シテ我ニ依頼セハ我ハ速カニ事實ヲ告クヘシト明
言スヘク而シテ本人ハ必ス證人ニ代リテ格闘セサル
可ラス格闘ノ上若シ本人ノ失敗ニ歸スト雖モ其ノ訟
權ヲ失フヲ無ク特リ證人ヲ黜斥シテ用キサルノミ若
代人ヲシテ格闘セシメ失敗
スレハ一手ヲ截斷セラル

以上記ス所即チ舊慣ニ設クル所ノ制限ノ如シ其ノ故
ハ諸蕃民及ヒ不埒底ノ法律ニテ制定セル證人控告ノ
慣例概シテ此ノ範圍ノ外ニ出サレハナリ

曾テアゴバルド及ビ聖アフサトスノ駁議ヲ惹キ起セ

ル根巴爾的王ノ憲法ハ既ニ前文ニ論述セリ其ノ文ニ
曰ク若シ被告ヨリ證人ヲ出シテ絶テ其ノ罪ヲ犯サハ
ル旨ヲ誓言スルキハ原告ハ其ノ證人ニ向テ格闘ヲ挑
ミ得ヘシ何トナレハ既ニ誓詞ヲ以テ事實ノ有無ヲ保
證スル以上ハ始終其ノ言ヲ主張シテ渝ラサルハ理ノ
當サニ然ルヘキ所ナレハナリト諛王ノ憲法頒布以來
證人ヲシテ更ニ格闘ヲ避クヘキ餘地ヲ有セシメス

第二十七回 原被ノ一人ト訴人ノ同輩トノ格
闘審法及ヒ裁判不當ノ上告ヲ論
ス

格闘審法ノ骨子ハ一刀ニ葛藤ヲ斬斷スルノ直捷法ナ
レハ覆審再理等ノ規則章程ト並ヒ行ハル、能ハス故
ニ羅馬法、教會律ノ成規ニ於ルカ如ク下等法院ノ裁判
ヲ復審センカ爲メニ上等法院ニ控告スル等ノ事ハ絶
テ佛國ニ知ラサル所ナリ

上告法ノ如キハ決シテ榮譽ヲ目的トシテ治ヲ敷ク所
ノ武俗ニ相應セサルカ故ニ此ノ精神ニ乖戾セサラン
トヲ欲シテ法官ノ上告ヲ禁止スルヲ猶ホ人民ニ於ル
カ如シ

斯ノ國民ノ上告法ハ曲直ヲ腕力ニ訴ヘテ一戰ノ下ニ

其ノ勝敗ヲ決スル外无シ筆舌ニ頼テ理非ヲ論辯スルノ學識ハ之ヲ後世ニ期セサルヲ得ス

是レ聖王路易カ其ノ法典ニ越訴上告ノ事ヲ不義重罪

ナリト斷言スル所以ニシテボーマノイルノ説ニモ受

封ノ臣其ノ主公ノ無狀ヲ愁訴セント欲スルハ先ツ

初メニ封田ノ繳納ヲ公告レ而メ后々我カ主公ノ領主

我主公ノ主公ナリ受封ノ臣ヲ陪隸トスルハニ上告

主公ハ侯伯ニシテ其ノ主公ハ即チ國王ナリ

レテ格闘ヲ挑ムヲ得ヘシ若シ又主公ヨリ受封ノ臣ヲ

州牧ニ上告スルハ必ス先ツ其ノ臣禮ヲ受ケサルヲ

ヲ公言セサル可ラスト謂ヘリ

受封ノ臣ニシテ主公ノ裁判不當ヲ上告スルハ即チ其

ノ判斷ヲ不正ナリ惡意アリト公言スルニ異ナラサレ

ハ主公ニ對レテ此ノ言ヲ吐クヲ將テ上ヲ干シ分ヲ紊

ルノ大罪ト為スモ敢テ其ノ理ナキニアラス

故ニ受封ノ臣ハ法院ノ主宰タル主公ニ對シテ裁判不

當ノ上告ヲ為ス代リニ其ノ法院ヲ成ス所ノ同輩ヲ上

告スヘシ然ルハ唯タ平生肩ヲ比フル所ノ同輩ヲ冒

瀆スルニ止マリテ主人ヲ犯スノ大罪ニ陷ルヲ免カル

ヘシ

裁判不當ヲ以テ同輩ヲ上告スルハ甚タ危險ノ事ナリ

トス何トナレハ訴人若シ裁判ノ落着スルヲ俟ツルハ
其ノ不當ニ非サル旨ヲ主張スル數人ト格闘セサル可
ラス若シ法官ノ未タ意見ヲ吐露セサル前ニ上告スル
ルハ其ノ裁判ニ同意シタルモノト格闘セサル可ラス
故ニ此ノ危險ヲ蹈サランカ為メ常ニ主公ニ請フテ各
法官ヲシテ高聲ニ意見ヲ吐露セシノ第一ノ法官發言
シ了リ第二ノ法官將ニ口ヲ開ントスルルニ上告者直
ニ之ヲ否ミテ虚言ナリ讒誣ナリト抗言シテ第一ノ法
官ニ格闘ヲ挑ムヘシ然ルルハ多人ニ敵對スルヲ免
カル、ナリ

全文
ボーマノイ
ノ著書ニ據ル

然ルニデフォントンスノ説ニ從ヘハ必ス三人ノ宣告
ヲ俟テ後ニ裁判ノ不當ヲ上告スル通例ニシテ而モ宣
告ノ法官三人ト格闘スルヲ記サレハ更ニ同意ヲ
表スル法官ト格闘スヘキ義務アルヲナシニ氏ノ言斯
ク抵牾スル所以ハ蓋シ當時全國普通ノ慣例極メテ鮮
ナクボーマノイル氏ハクレルモントノ法式ヲ記シテ
フォントンス氏ハフェルモンドイスノ慣例ヲ説クニ由レ
リ

若シ同輩中ノ一人其ノ裁判ノ不當ニアラサル旨ヲ主
張スルルハ法官命シテ格闘ノ約ヲ為サレノ且ツ上告

人ニ始終其ノ趣意ヲ變更セサル旨ノ保證ヲ出サレム
然レ其ノ上告サル、同輩ハ必ス主公ノ封臣ニテ而
モ上告ノ案件ヲ辯護セサルノ義務否ラサレハ主公ニ
六十^リフルノ罰鍰ヲ納ムアルヲ以テ更ニ保證ヲ立
ツルヲ要セス

若シ上告人ニテ裁判不當ノ憑據ヲ舉ゲサルハ各六
十^リフルノ罰鍰ヲ其ノ主公ト上告セル同輩ト及ヒ
裁判ニ同意シタルモノトニ納メサル可ラス
若シ明カニ重罪ノ嫌疑ヲ得タル人ヲ拘禁シ而シテ刑
罰ヲ宣告シタル以上ハ裁判不當ノ上告ヲ為ス能ハス

一タヒ之ヲ許スルハ上告ニ托シテ餘命ヲ苟延シ或ハ
放釋ノ僥倖ヲ得ヘヤヲ以テナリ

若シ裁判ノ不當非理ヲ揚言スレ其ノ言ヲ食マサレ
シカ為メニ格闘ノ約ヲ挑マサル人ハ法官ノ榮譽ヲ損
害スル言語ヲ吐クニ當リテ士人ハ六^ス一^ス奴隸ハ五
^ス一^スノ罰鍰ヲ納ムヘシ

法官若クハ同輩ハ假令格闘シテ勝サルモ敢テ性命ヲ
喪ヒ或ハ支體ヲ毀傷スルノ患ナシト雖モ若シ重罪ニ
係ル上告人ナレハ死刑ヲ免ル能ハス

斯ク裁判ノ不當ヲ以テ同輩ヲ上告スルノ趣意ハ親ラ

主公ノ原告タル地位ニ居ルヲ避クルニ外ナラス若
レ又主公法院ヲ開クヘキ同輩ヲ畜ハス或ハ之アルモ
定員ニ不足スルモハ自費ヲ以テ其ノ領主ヨリ同輩ヲ
借用スルヲ得ヘシ然レモ右同輩ハ強テ裁判ヲ宣告ス
ルノ義務ナキヲ以テ若シ之ヲ欲セサレハ唯々意見ヲ
吐露スルニ止マルヲ陳述スルヲ得ヘシ特別ノ案件
ニ於テハ主公躬ヲ法官ト為リテ裁判ヲ宣告シ若シ不
當ノ上告ヲ受ルモハ親ラ之ヲ辨明セサル可ラス
若シ主公貧クシテ領主ノ同輩ヲ借用スルノ資力ニ乏
シク或ハ之ヲ怠リテ招請セス或ハ領主其ノ招請ヲ肯

セサルモハ主公親ラ裁判ヲ宣告スルヲ能ハス然レハ
何人ニ拘ラス裁判權ヲ有セサル法院ニ向テ訴答スヘ
キ義務ヲ負ハサルニ依リテ右案件ヲ領主ノ法院ニ上
移シテ其ノ裁判ヲ請フヘシ

以上論スル所ハ即チ裁判權ト封土ノ法ノ畛域ヲ殊ニ
スル實因ニシテ佛國ノ法律士ニ「封土ト裁判トハ各別
ノ物ナリ」トノ法訣アルハ職トシテ之ニ由レリ何トナ
レハ受封ノ臣ヲ畜ハサル主公頗ル夥シク概テ無資無
力ニシテ法院ヲ開キ能ハサルヨリ一切ノ訴訟自ラ領
主ニ歸シテ主公ハ終ニ從來ノ裁判權ヲ失フニ至レリ

裁判ニ同意セル同輩ハ皆ナ宣告ノ場ニ列席シテ若シ
 訴人ヨリ裁判ノ不當ヲ上告セント欲シ其ノ意見ヲ問
 フトアレハ各同意ノ旨ヲ答ヘサル可ラスデフオンテ
 ンスカ所謂事ヲ執ル忠直鄭重ニシテ規避阻滯ノ弊ナ
 レト是レナリ予思フニ英國ノ裁判法ニ性命ニ係ル重
 事ヲ判決スルニハ都テ陪審官ノ同意ヲ要スルノ慣例
 アルハ蓋シ此ノ遺風ナランカ
 故ニ多數ノ同意ニ依リテ裁判ヲ宣告シ若シ可否相半
 スルハ刑事ナレハ犯人ノ無罪ニ決シ貸借上ノ訴訟
 ナレハ借主ノ利ニ歸シ相續權ノ爭ナレハ被告ノ勝ト

定ム

デフオンテンスニ據レハ若シ法院列席ノ人員四名少極
 ニ過キサルカ或ハ全員缺席シ若シクハ其ノ中ノ老鍊
 ナル者不參ノ時ハ同輩ノ義務トシテ出院ヲ辭スル
 ヲ得ス此ノ義務ヲ辭スルハ猶ホ劇戰ニ際シ從士ヲ具
 セサルヲ口實トシテ主公ニ加勢セサルカ如シ然レモ
 王公ノ職分ニ於テハ常ニ法院清肅ニシテ人民ノ尊重
 スル所ト為リ封臣ノ中ヨリ智勇ノ士ヲ拔擢セサル可
 ラス茲ニ之ヲ記ス所以ハ封臣ノ義務ハ戰闘ニ從事シ
 裁判ヲ宣告スルニ在リテ二事更ニ軒輊スル所ナキヲ

示スノミ

主公其ノ封臣ニ對シテ訴訟ヲ起シ而シテ曲直ヲ自己ノ法院ニ爭フテ勝タサルハ裁判ノ不當ヲ以テ封臣ノ一人ヲ上告スル權アリ然ルニ封臣ハ忠勤ノ誓約ヲ守リテ主公ニ敬事スヘキ職分アリ主公ハ封士ヲ愛撫シテ其ノ忠勤ニ酬ユヘキ義務ヲ荷フテ自ラ對等ノ交際ニ同シカラサルヲ以テ主公カ唯タ其ノ裁判ノ不當ヲ公言スルニ止マルト封臣ノ邪曲ヲ許テ其ノ人ヲ攻撃スルトノ區域ナカル可ラス故ニ前項ニ在リテハ主公自ラ其ノ法院ニ抗抵スルノミニテ敢テ他人ニ影響

ヲ與ヘサレハ格闘ノ約ヲ為スタ要セサレ氏後項ニ至テハ封士ノ榮譽ヲ攻撃スルニ當ルヲ以テ格闘ヲ為サル可ラス而シテ勝敗一決ノ上ハ公衆ノ安寧ヲ維持セシカ為メニ曲者ノ性命資産ヲ褫奪セサルヲ得ス斯ノ如キ場合ニ臨テハ勢訟事ノ區域ヲ分畫セサルヲ得ス而シテ歲月ヲ閱スルノ久シキ其ノ區域益擴開シテ相別レタリボーマノイル曰ク裁判ノ不當ヲ上告スルモ若シ同輩ニ對シテ一身ノ榮譽ヲ攻撃スルハ直ニ格闘ヲ為セ氏若シ上告ノ趣意特リ裁判ノ當否ニ止マルハ或ハ格闘ニ依ルカ或ハ法律ニ依リテ爭論

ヲ決定シ都テ本人ノ自由ニ放任ス然レモボーマノイ
ルカ此ノ言ヲ為セル時ノ世態ハ專ラ格闘審法ノ慣習
ヲ抑制スルヲニ傾向シ加フルニ上告サレタル同輩ニ
格闘ヲ為サシメ或ハ否ラサルモ本人ノ情願ニ任セテ
一己ノ辨護ヲ許スハ齊シク從來ノ榮譽ノ道ト及ヒ
主公ノ訟事ヲ扞禦スヘキ封臣ノ義務トニ背馳スルニ
據テ之ヲ見レハボーマノイルノ此ノ區別ハ蓋シ佛國
新定ノ規則ニ基クモノナルヘシ
予ハ敢テ裁判不當ノ上告ヲ悉ク格闘審法ヲ以テ決定
セリト思考スルニアラス其ノ格闘ヲ行フニ至ルハ更

ニ自餘ノ訟事ニ於ルニ異ナラス讀者カ第二十五回ノ
禁止令ヲ閱シテ記臆スルカ如ク即チ訟事ノ理由ヲ審
問シテ其ノ格闘ノ約ヲ抹殺スヘキヤ否ヤヲ檢理スル
ハ上等法院ノ職務ニ屬スルナリ
國王ノ法院ニ對シテ裁判ノ不當ヲ上告スルノ理ナシ
其ノ故ハ國中無上ノ地位ニ在ル王者ヲ上告スヘキ高
等ノ法院アラサルヲ以テナリ
此ノ原則ノ制定ハ勢然ラサルヲ得サルノ政法ニシテ
而モ當時ノ訴訟章程ニ生スル弊害ヲ刈除スル民法ノ
作用アリ若シ夫レ主公ニ於テ其ノ法院ノ裁判不當ヲ

以テ上告サル、ノ恐アルカ或ハ訴人カ上告ニ一決セ
ルヲ承知スルニ方リテ裁判ノ權利上ヨリソノ上告
ノ路ヲ塞カサルヲ得スト思フキハ特ニ國王ニ上奏シ
テ其ノ法院ノ同輩ヲ招請スヘシ其ノ例ハ即チ非立王
カ其ノ内閣議員ヲコルベイ教長ノ法院ニ遣ハシテ訟
務ヲ裁判セシメタル是レナリ
若シ國王ニ直隸セル主公ニシテ國王ノ法院ヨリ法官
ヲ招請シ能ハサルキハ己カ法院ヲ國王ニ上移シ得ヘ
ク若シ亦タ陪隸ナレハ一タビ所轄ノ領主ニ移シ傳遞
シテ終ニ王室ニ達スヘシ

當時固ヨリ今日ノ如キ完備セル上告章程アラサルハ
論ヲ俟スト雖モ其ノ國王ヲ以テ百川ノ淵源其ノ宗朝
スル所ノ大海ト認ムルニ至テハ未タ曾テ同レカラサ
ルハナキナリ

萬法精理卷之二十八上 畢

明治八年十一月廿八日版權免許

繙譯並出版人 何 禮之

東京富士見町四丁目十一番地

馬喰町二丁目

島村利助

芝太神宮前三島町

山中市兵衛

日本橋通三丁目

發兌 書林

丸家善七

南傳馬町二丁目

穴山篤太郎